915. 3-1327
1200500758483

915.5
I.32

宮廷女流日記文學

文學士 池田龜鑑 著

昭和二十四年 帝國圖書

545-23

はしがき

わが國の文學の歴史について申しますと、王朝時代といふ一時代は、後宮の女性を中心とする浪漫的な文學の榮えた時代です。その美しい浪漫的の精神が、どうして宮廷に發生し、どうして發達し、又どうして凋落したか、その事情を本質的に明かにすることは、私に於て、久しい以前からの限りない興味でした。で、私は、ずゐ分以前から、まるでむさぼるやうに、その時代の物語や、家集などをよみふけりましたが、それ等の多くの作品の中で、もつとも私の感興を引きましたのは、後宮女性の日記といふ特殊な文學の一系列でした。

浪漫的な文化の中心が、紅玉の炎のやうな感情の奔放であるとしますと、思索的な文化の中心は、深淵の青色にも似た理性の透徹であると云へませう。紅の感情と、青の理性との織りなした心の錦が、とりもなほさず、これ等の日記文學だ

と思ひます。

宮廷女流の日記文學を少しづゝ調べて見ようと思ひ立つたのは、今からおよそ六年ばかり前のことです。それから、機會あるごとに、東京をとび出して、あちらの圖書館、こちらの文庫と、方々歩きまはつて、去年、不完全ながら、ともかく、宮廷女流日記考」二十三卷の一段落をつけることにしました。それは、土佐日記考、蜻蛉日記考、和泉式部日記考、紫式部日記考、清少納言枕草子考、更級日記考、讃岐典侍日記考、辨内侍日記考、十六夜日記考、中務内侍日記考から成るもので、それに宮廷女流日記索引と、宮廷女流日記年表とを合せたものです。

以上は、只今までの研究では、まるで未熟で、お話にならないものです。これを基礎にして、これから、十年も、二十年も、一生懸命に勉強して行かなければなりますまい。わづか五年や六年[illegible]こんな仕事が完全に出來る筈のものではないのですから。

でも、私としては本當に一生懸命でした。全くすべてをうちこんで勉強しました。興のわいてきたときには、幾度びか徹夜もしました。出來上つたものは、どんなに物足りなくても、過程そのものは、實に尊かつたと思ひます。私が、學問の面白さと、有難さとを、つくづくと體驗したのは、全くこの勉强のおかげでした。

けれども、正直に申しますと、この仕事に從つてゐる間、私は、ともすれば、矛盾した心の對立に苦しみました。それは、國文學の研究に、考證的態度と、鑑賞的態度とが、どうしても相調和することの出來ないものではないかといふ疑問でした。何と長い間、この對立に苦しんだことでせう。

だが、有難いことには、近ごろは、何だか、二つのものに區別がおかれないやうになつてきました。かつて、阿波文庫に尋ねて行つて、淡ぐらい書庫の中で、ゆくりなくも、原中最秘抄や、千鳥抄の古寫本を發見して、これが、日本に、二部か三部かしかない貴重な本であると知つたとき、うれしくて、うれしくて、とてもぢつとして

ねられない位でした。さうしたよろこびは、心靜かに、文學を鑑賞するときのよろこびと、ちつともちがはない歡びでした。私は、文學研究以外に、文學鑑賞といふ世界が、別に存在するかのやうに考へてゐた從來の考へが、根本からあやまつてゐることを體驗しました。研究卽鑑賞、鑑賞卽生活といふ境地こそ、私の求めてゐた境地であつて、その境地は、今まで、少しも氣がつかなかつたけれど、自分自身も、やはり無意識的にもつてゐたのだと悟りました。

この悟りの前には、愚鈍な私には、あまりにも長い試練がありました。堪へられないやうな苦惱がありました。私はほとんど、常規を逸するやうな焦慮と苦悶とを經驗しました。さういふ時、慈父の如き愛をもつて、ねんごろに指導して下さり、勇氣を與へて下すつたのは、近くは藤村先生、橋本先生、久松先生、かつては松井先生、吉田先生、垣内先生をはじめ、多くの恩師先輩の方々でした。

「宮廷女流日記考」は、反逆と異端とを愛し、種々なる焦慮と懷疑とに動搖する二

十だいの精神の中に生れたものです。研究と申しましても、本文の校定、書史の考證、傳記の詮索等に、大部分の努力を費したものですが、しかし、今出して見ますと、その文字の一つ一つに、さういふ若々しい精神が、そのままこもつてゐるやうな氣がいたします。

本書は、その「宮廷女流日記考」二十三卷にまとめた知識を基礎として、も一度日記全體を讀みかへしたときの感激を、そのままに書いて見ようとしたものです。即ち、考證的な方面は、すべて「宮廷女流日記考」に殘し、ここでは一切ふれないで、全然主觀的な感じ、或は評論だけを書かうと思ひました。しかし、又、よく考へて見ますと、「宮廷女流日記考」は、馬鹿々々しいほど大きなもので、永久に世の中にあらはれることはあるまいと思ひますし、又、日記文學は、まだ、あまり世の中に理解されてゐない上に、作者の傳記などについても、ずゐ分滑稽な誤解もあるやうですから、ほんの少しづつでも、書史學的な、或は傳記的な說明も加へなければいけな

いとも思はれ、やむを得ず、蛇足のやうなものを、つけることにしました。

しかし、何といつても、限られた小冊子ですから、とても十分なことの出來る筈はありません。土佐日記は、全然はぶくことにいたしました。紫式部の傳記と、清少納言の傳記と、枕草子の解說及び批評とは、近く別に御叱正を仰ぐ機會がありますから、ここでは全然ふれないことにいたしました。又、孝標女の傳記と、更級日記の解說とは、已に先輩の權威ある研究が完成せられてゐますから、別に愚考を加へることを御遠慮することにいたしました。又、日記文學ではありませんけれど、ほとんど日記といつてもいい家集をのこした人で、檜垣嫗、伊勢、加茂保憲女、小大君、相模、出羽弁、建禮門院右京大夫、俊成卿女等についても、少しくのべたいと思つて、已に原稿もまとめて見ましたけれど、頁の都合上、すべて省略いたさなければならなくなりました。又、十六夜日記及び、和泉式部日記の評論、女流文藝の發生についての考察等は、已に版に組みましたけれど、百五十ページも超加

したために、やむを得ず省きました。しかし、これ等は、近き將來において、ぜひまとめて出すつもりです。

以上のやうな次第で、この書は、實に、通俗的な、概論的な、常識的な、研究ともつかず、考證ともつかず、評論ともつかない不徹底な、妙なものになつてしまひました。「宮廷女流日記考」で、一萬八千枚も稿を重ねて、なほ足りなかつたものを、この小冊子にまとめるなどとはよほど無理なことでした。この書は、專門の學者のために示されたものでなくて、宮廷女流日記について、まだ多くの知識をもたない人々のために示さるべきもので、從つて、宮廷女流日記の一面の考察にすぎないのです。學問的には、まだまだ、他に多くの方面が殘されてゐることを、何卒御承知下さい。

この書の出るやうになりましたのは、全く藤村先生のおかげです。又、橋本、久松兩先生には、色々御親切な御教示を受けました。又、高師の玉井先生には、十六

夜日記について、色々こまかな御指導をうけました。あつく御禮を申し上げます。又書肆至文堂及び印刷所京華社には、約束の日に校正を果すことが出來ないで、色々迷惑をかけました。深くおわびをいたします。

只今、私は、藤村博士の御指導のもとに、源氏物語諸註考證の大きな仕事に忙殺せられてゐまして、この書の原稿の如きは、大部分夜十一時から午前一時までの間に筆を執られたものであり、校正の如きも、電車の中や、驛の待合室や、食堂の片隅などで、寸暇を利用してなされたものです。多分誤りが少くないでせう。どうか、御親切に御教示のほど、お願ひいたします。

昭和二年一月

東京帝國大學文學部研究室にて

著者

目次

一、蜻蛉日記……一
一、蜻蛉日記の傳本と註釋書……一
一、道綱母の事蹟について……二七
一、蜻蛉日記にあらはれたる現實生活の破綻と懊惱……五九
二、和泉式部日記……一〇七
一、和泉式部日記の傳本と註釋書……一〇七
一、和泉式部の事蹟と傳說……一二五

三、紫式部日記……一七九
一、紫式部日記と日記歌……一七九
一、紫式部日記に於ける「心ばへ」なるものの先驗的性質……一九七
四、更級日記……二三一
一、生活魔化の藝術としての更級日記……二三一
五、讃岐典侍日記……二六一
一、讃岐典侍日記の傳本と註釋書……二六三
一、讃岐典侍の事蹟について……二七五
一、讃岐典侍日記にあらはれたる人間愛と自己凝視……三〇三
六、十六夜日記……三三五
一、うたゝねの記と十六夜日記……三三五
一、安嘉門院四條について……三七一
七、辨內侍日記……四〇一
一、辨內侍日記の傳本と註釋書……四〇一
一、辨內侍の事蹟について……
一、微笑の文學としての辨內侍日記……四三一
八、中務內侍日記……四五三
一、中務內侍日記の傳本及び註釋書……四五三

目次

一、中務内侍の事蹟について……四
一、中務内侍日記にあらはれたる個性の分裂と動搖……四七九

以上

——このつたなき書を
ちちははのみ前にたてまつる——

宮廷女流日記文學

蜻蛉日記の傳本と註釋書

帝國圖書館藏

大鏡卷五太政大臣兼家の條に

次郎君は、陸奥守倫寧ぬしの女の腹におはせし君なり、道綱と聞えし。大納言までなりて、右大將かけたまへりき。この母君、きはめたる和歌の上手におはしければ、この殿の通はせ給ひけるほどのこと、歌など書きあつめて、かげろふの日記と名づけて、世にひろめ給へり。

とある。この書を、かげろふの日記と云つたのは、上卷の終りに、

蜻蛉日記の傳本と註釋書

物はかなきを思へば、あるかなきかの心ちする。かげろふの日記と云ふべし。

とあるによつて由來が明かである。かげろふの假字は、多く蜻蛉の二字をあてられる。いつの頃から、さう書くやうになつたのか、明かでない。鎌倉時代には、已に蜻蛉と書いたものであらう。それは、明月記寛喜二年六月十七日の條に、

但馬前司來臨午時許清談移時刻、借草子等、蜻蛉日記更級日記、隆房卿日記假名安元御製治承右大臣百首、卅六人傳、依同心人不存隔心云々

とあり、同書天福元年三月廿日の條に、

又蜻蛉日記十所許撰出、同送金吾許、紫日記更級日記中宮太夫書進之自承明門院被擬其所已書出進入了云云其外蜻蛉所殘歟云々

とあるによつて明かであらう。

かげろふの字は、一に遊士とも書かれてゐる。八雲御抄學書篇の私記には、遊士日記と云はれてゐる。士は、もと絲であつたであらう。清水濱臣の寫本には、

遊絲日記とあるによつても知られる。

さて、かげろふは、蜻蛉の字をあてるために、虫のことであるか、或は陽炎のことであるか、それについての辯が、解環に見えて、陽炎の意に取るのが正しいと說いてゐる。

契沖と山川眞淸との說をあはせ取つた橫山由淸自筆の書入本に、

かげろふに三あり、野馬と蜻蛉と今一は夕暮に命かけたるなどよめるやう、蜉蝣にやと覺ゆ。されどそれせば和名にはひをむしとのみいへり。萬葉に、かげろふの夕とよみたるは、蜻蛉なるを、よくもみずして、かげろふといふなのはかなく聞ゆれば、ひをむしの別名かなど思ひたがへて、讀なしけるにや。

盈按こは契沖師の說なれど、いかにぞや侍らん、こはただあるかなきかといふ心をもて、野馬陽炎のかげろふとみて有なん。ひをむしの別名などまで思ふべきにあらずと見えてゐる。又、帝國圖書館所藏榊原氏舊藏本上卷の首に、

題號蜻蛉の文字なうめたるはまぎらはしくてわろし。此日記上の卷末に物はかなきを思へば、あるかなきかの心ちする、かげろふの日記といふべしとある詞によりて考ふれば、莊周がいはゆる野馬にして陽炎なり。朗詠にもえらまれし詩の天外遊絲或有無とある遊糸、今いとゆふ即ちいにしへに云へる所のかげろふにして、この題號もその心なり。

と云つて、解環の説に從つてゐる。源氏蜻蛉の卷についても、諸説があつて、一定しないが、この日記に、かげろふと云ふのは、やはり蟲のことではなくて陽炎のことであらう。

この書の名は、群書一覽卷三、百人一首一夕話卷五にも見え、林恕の本朝通鑑卷二八にも見えてゐる。群書類從にをさめられた本朝書籍目錄は、永正二年の寫本によつたものであつて、これには

蜻蛉記　三卷

と見えてゐる。林氏本の本朝書目には、

蜻蛉記　一卷

と見えてゐるのであるが、これは、蜻蛉日記のことであらう。內閣文庫所藏の冷泉家藏書目錄には、

蜻蛉日記　三卷

とあるが、この本は、本朝書籍目錄の最も古い寫本を傳へるものと思ふ。冷泉家藏書目錄とは、後人の假りにつけた名であらう。奥に、

右以冷泉大納言爲富卿御本書寫之以准后本令一校者也
康安二年正月七日　刑部侍郎光之

とあるのであるから、本朝書籍目錄の傳本としては、可なり古い系統のものと見るべきであらう。その本の附錄のやうに書添へられたものに、本朝書籍目錄外錄といふものがあつて、それには、私記の條に

遊士日記傳大納言母

とある。おそらくこれは、八雲御抄を引いたものであらう。

内閣文庫には、二種の色葉和歌集の古寫本を傳へてゐるが、その中、弘長二年壬戌三月十三日巳尅書寫之畢と奥書のある本には、撰抄時代者の條に、

傳大納言(道綱)の母かけろふ日記云々

と見えてゐる。

日記の卷數は、流布本はすべて八卷である。上中下三卷を、更に上下、又は上中下に分けたのである。この八卷を、元祿十年刊本は三冊となし、寶暦六年刊本は八冊となし、文政元年刊本は三冊としてゐる。八雲御抄學書篇の私記には、日記の名を出して卷數をあげない。本朝書籍目錄には、前に上げたやうに三卷、本朝書目には、一卷と見えてゐる。坂徵の解環に、

近比案スルニ、上卷ノ終ニ、カゲロフト名付ル旨ヲ述ラレタルヲ思ヘバ、ソノ本ハ、上中下三卷ノ卷物ニテアリシヲ、トジ本ニセシ時、丁數カサナル故ニ、今ノゴトク、八册ニワカチシニヤ。

と云つてゐる。日記のやうな私ざまのものが、卷本にかかれたか否かは、なほ十分考へられなければならない。前田侯爵家に秘藏される藤原定家自筆の土佐日記は、文暦二年五月十三日、定家が、蓮華王院寶藏の紀氏自筆本を見て、書寫したものであるが、その奥書に、

料紙白紙（不打無界）高一尺一寸（三分許）廣一尺七寸二分許紙也、廿六枚、無軸、表紙續白紙一枚（端聊折返不立竹無紐）有外題、土佐日記、貫之筆。

とかいてゐる。これによれば、貫之の書いた土佐日記は、草子でなくして、卷本であつたことが分る。

かげろふ日記の原本が、卷本であつたか、册子であつたかは、かなりむづかしい問題であるが、少くとも、今のやうな錯簡を生み出した本は、卷本でなく、草子であ

つたであらうと思はれる。やはり、更級日記のやうに、紙の綴ぢあやまりや、脫落などがあつたものと思はれる。三冊について、それを各々上中下と區別したのは、後人の所爲で、もとは、かく順序をたてて、記されたものであるまい。

八冊目の半ばから下は、後人の加筆であることは、已に契沖も解環も指摘したやうに、疑のない所であらう。そして、この部分は、別に傳大納言母集とも云はれ、又は道綱集とも云はれて、いづれも宮內省圖書寮に秘藏されてゐる。この家集は、道綱母自身の書いた本當の家集であるとは云へないかも知れないけれど、日記の成立その他について、參考すべき書であるから、これについては、後で少しく考へて見たいと思ふ。

蜻蛉日記は、現在傳はる古典の中で、最も錯簡の甚しいものの一つで、このままなら、意味の通じない所が多い。流布本の中で、明かに錯簡と認められ、その正しい原形の推知せられる場所が二三ある。それは、卷中の中、十六丁は十三丁に、十五丁は十四丁に、十三丁は十五丁に、十四丁は十六丁に、それぞれ相前後してゐる。又、卷下の中、十四丁と十五丁とが互に相前後してゐる。この錯簡について、解環は綴ぢ方のあやまりではなく、卷本の紙の前後したものであらうと云ふけれど、さうではあるまい。必ず刊本の綴ぢあやまりであらう。清水濱臣の寫本によると、この錯簡は全然ないし、前後の關係から、正しい形は、すぐ推定される。

なほ又、刊本と解環本との錯簡の場所は、卷下の下に、ふみみれど雲のかけはし云々の歌のあたりが、十七行づつ前後錯簡してゐる。清水濱臣の寫本は、流布本と變らない。多分解環の方があやまつてゐるのであらう。

次に、本文の記事について、明かに錯簡と思はれる場所は、天祿元年六月、貞觀殿の尙侍と文の贈答のあるところである。それは、天祿二年六月のことで、あやまつて元年の條に輯錄されたものと思はれる。これについて、榮華物語抄第一に

大鏡卷四師輔に貞觀殿內侍と見え、日本記略圓融安和二年以從五位上藤登子爲尙侍とい

ひ、大鏡裏書には、貞觀殿尚侍登子と題して、安和二年任尚侍と見え、蜻蛉日記上巻（康保四年）に、貞觀殿の御かたは、かさとし内侍のかみになり給ふと有、安和二年は昨年にて、去々年にはあらず。前田夏繁云天祿二年の文の元年に混入したるならんといへり。

と云つてゐる。この外、かくの如く錯簡した場所が、他にいかほどあるのか、計り知れない。解環に、書寫の際に誤りやすい文字について、可なり詳細な考證がある。

ソノ轉ノ大例チイハバ、ろうらるれ等ハ、互ニアヤマリヤスシ、或ハにノ篇旁チ脱シテとト成、にチにニタガヘ、はハしニ轉ジ、めハせニ變ジ、せガ又せニ化ヌ、カヤウノ類カゾフルニイトマナシ、甚シクシテハえノ一字ガうんノ二字ニ分レ、ろノ二字チ乃ノ一字ニアハセ、或ハあノ字ガふノ二字ニハナレ、ゑく字ガゑトノ二字ニ成、又ハゑ、ノ二字ニモ誤ル、コレラノルイ又スクナカラズ、サレドソレラハ猶イマダシ、然ノ字ガ然ヘノ二字ノカナニナリ、ち抵チカナニウツセルガ又轉ジテなりひ門ニウツリナガレ、或ハきノ字りさるノ三字ニ轉セシ如キモ有、カク大ニ轉ズトハイヘドモ、只一轉ノ誤ハヨク又思ヒメグラシテサカノボリモトムルニ、猶タヨリナキニアラズ、モシクハコレラチ又再轉シテ、凡假字ニハ四十七字ノ外ニモムカシヨリ書ナラハセシカナ文字ノアマタアレバ、ソレラノカナニ又變ジカハリテ、後ハ何チ便ニモトノ字チサグリ出サン、タトヘバ世ニウツケタルシレモノガ、高津鳥トヤラン者ニフトイザナハレテシラヌ世界ニサマヨヒ、我フルサトハイヅコノイヅチナラント方角ダニシラヌ狀ニ成ヌベシ、チカクタトフルニ此日記ノ上巻ニ兼家公ノ長哥ノ中ニゆくひくれとのあうしはト書ル所有、アマタタビ傾キテ思ヒメグラセバやしハ問ノ字チカナニ書カヘタル也、其又問ノ字ハモト何ノ字チ訛リシ物トオシハカリ置テ、サテ前後ノ文言チ考合テヨメバナニクレコトノアリシカバノ轉訛セル事疑ナシ、即右ノ長哥ノ末ニモかうハきてゆくトヤ云ヘルチ原本ニハ行かうしぬるトアリ、是ハ又今ガ何ニ變シタル也ケリ。

蜻蛉日記の傳本と註釋書　一一

又この日記に「も」の假名を「ん」と書いた所が少くない。これについて解環に考證があるけれど、煩はしいからはぶくことにする。

二

蜻蛉日記の流布刊本は、元祿十年版のものと、寶暦六年版のものと、文政元年版のものと、三種がある。故藤岡博士は、寶暦三年の版があるやうに云はれてゐるが、六年の誤であらう。これ等の版本は、いづれも同一の版であつて、異本ではない。從つて、本文を校定する上に、何等參考になるものではない。

契沖は、元祿九年、水戸家の本をもつて、校合して、蜻蛉日記考證八卷を書いたのであるが、この原本は、京都上加茂の文庫に秘藏せられてゐると云ふことである。この考證は、蜻蛉日記研究として、最初にあらはれたものであるが、詳しいものではない。ところどころ拔き出して考をのべてあるにすぎない。天明五年に刊行せられた蜻蛉日記解環十八冊は、坂徵、仲文甫と號する人の著す所である。著者の傳は明かでない。契沖の考證本に基いて、私考を加へたものである。坂徵は、契沖の自筆本を用ひたのでなく、寫本三種によつたものである。その尾州から求めたものは、谷川士清の本をうつしたものである。解環の說には、承認し難きものが少くない。これは、坂徵が、國文學に對する知識の不十分であつたためであらう。しかし、他に類書がなく、異本の發見せられない今日に於ては、この書も重要な參考資料であらう。就中、その大鏡、榮華物語を引いて論じてゐる所は、最も參考に價するであらう。

次に未刊のものではあるが、鎗田龜次氏の「平安朝日記の研究」は、大部分を蜻蛉日記のために費されたもので、現に、東大國文學研究室に保管されてゐる。又、金澤の人で、藤井準夫といふ人が「蜻蛉日記詳解」といふ非常に詳細な研究を完成され、芳賀矢一博士も一度閲覽されたさうであるが、まだ私は見てゐない。私の「蜻

蜻日記考」四卷は、十二種の寫本或は書入本によつて本文を考へ、年表及び索引を附し、出來るだけ詳細な註を試みたものであるが、まだまだ發表すべきほどの研究ではない。

近頃、國文叢書や、日本文學叢書や、その他二三の刊本の頭註は、たいてい解環の說によつたもので、それ以上の新說はあまり見あたらない。京都帝國大學から、全譯王朝文學叢書が刊行されて、その中に、蜻蛉日記の現代語譯が出されるさうで、期待してまつてゐるけれど、まだ發行せられない。

蜻蛉日記の寫本は、かなり方々に傳へられてゐるが、たいてい右流布本か、契沖の考證本か、いづれかの系統のものである。南葵文庫所藏の寫本三冊も、神宮文庫所藏の寫本三冊も、帝國圖書館所藏の寫本三冊も、彰考館所藏の二種の寫本各三冊も、いづれも異系統の本ではない。東京高等師範學校に所藏せられる寫本一冊は、清水濱臣の書寫したもので、奥に、

延寶元年丑九月下四日寫之

享和三亥年四月書寫畢　濱（判）

とあり、印本、身本と略號ある二種の異本をもつて、校合し、濱臣自ら考を加へたものである。この寫本は、流布本とは異つた系統の本で、他にも必ず傳へられてゐるであらうが、まだ管見に入らない。校定の上に、非常に參考になる本ではあるが、をしいことには、上、下の二卷だけで、中卷はをさめられてゐない。

契沖以後、この日記を校定し、考を加へたものは少くない。今私の見たものの中で、目ぼしいものを二三あげて見ようと思ふ。

一、東京高等師範學校所藏横山由清舊藏本三冊

この本は、元祿十丁丑年仲春吉辰、書林京小島市右衛門　大阪隅谷源右衛門板行とある刊本で、上卷の終りに、

注異者今賜借　水戸中納言光圀卿御本對校而注者也

蜻蛉日記の傳本と註釋書　一五

元祿九年四月十一日　契沖

嘉永五年十月十六日謄寫了、六年三月二日家本再校了

以赭墨者　後學　山川直清在判

萬延元年六月廿八日、以契沖阿闍梨眞蹟本温故堂藏山川

直清影寫校合本校合註異了　横山由清判

とあり、下卷の終りに

弘化四年十月中旬以安田躬弦校合本并古寫一本校合卒業　横山由清

萬延元年七月七日、以契沖阿闍梨眞蹟本温故堂藏山川眞清

校合本校異註付了　由清判

とある。これによつて、この本の由來は明かである。

二、神宮文庫所藏寫本三册

この本は刊本のままを謄寫したもので、本文そのものは別にめづらしいものではない。表紙に

契沖、海北若沖、谷川丹齋、村田橋彦、慶德麗女等校合本ナリ

と云ひ、上卷の奥に、朱にて

註異者令賜水戸中納言光圀卿御本對校而註者也

元祿九年四月十一日

とあり、下卷の奥に、朱にて、

右蜻蛉日記一部三册者右大將道綱母之作也

元祿九年四月十日以水戸中納言卿御本一校了　密乘沙門契沖

とあり、更に朱にて、

以海北若沖先生本寫

元文庚申十一月既望　小野田重好

とあり、墨にて、

延享甲子五月校之　私考則黒書　谷川士清

とある。これによると、朱は契沖及び若沖の本の書入れであり、墨は、士清の書入れであらう。今一つ藍の書入があるが、何人のものか明かでないが、按ふに村田橋彦か、或は荒木田麗女かのものであらう。

最後に墨で、

寶暦五乙年玄歳正月下旬寫之畢

とあり、その次に、別筆で、

右自子住邨田橋彦ノ本ニ就テ校合畢

安永八巳亥十月中旬

とある。

三、宮内省圖書寮所藏伴蒿蹊書入本八冊

この本は、寶暦六年刊本に、書入れをしたもので、奥に、朱にて、

右蜻蛉日記壹部三冊者右大將道綱母之作也

元祿九年四月十四日以水戸中納言殿御本一校了　密乘抄門契沖

とあり、藍にて、

以契沖阿闍梨校正本書入畢、然猶未詳更許多、故問以愚按注、不得明辯者

闕疑云爾　安永五丙申歳九月念七日功畢　閑田子蒿蹊述

とある。

四、南葵文庫所藏寶暦六年刊本八冊

この本は、寶暦六子十二月、大阪心齋橋淡路町角、安井嘉兵衛再版の本で、元祿九年四月十四日、以水戸中納言卿御本一校了云々の契沖の奥書を寫してゐる。本文には、可なり詳細な書入があるが、何人の書いたものであるか明かでない。各冊のはじめに、陽春廬記の朱印がある。

五、帝國圖書館所藏富士谷成章書入本三冊

この本は、寶暦六年刊本で、やはり安井嘉兵衛の再版にかかる本であるが、諸所に朱の書入がある。奥に、

此書天保二年三月、京都於書林得富士谷仙右衛門成章（賀川文藏弟）成元（又號御杖）父子自筆書入本也、然ルニ經年虫喰多シ、依同年八月令二書林命シテ裏ヲ打一表紙ヲ改ル者也　天保二年八月二十八日

とあり、靜幽文庫の印がある。

六、帝國圖書館所藏伊藤光總舊藏本八册

この本は、寶暦六年刊本で、やはり安井嘉兵衛再板の本である。もと榊原芳野の所藏の本であつて、下卷の終りに「伊藤光總藏書」の朱印がある。この本には、契沖の說と、解環の說と、光中の說とをあげ、詳細に考をのべたものである。

蜻蛉日記に關係して考へなければならないことは、道綱母集についてである。道綱母集は、これまで、その性質が學界に知られてゐなかつたのであるが、さういふ本があることは事實である。それは、宮內省圖書寮の所藏がかる二種の寫本である。

第一の寫本は、道綱母集と外題のあるもので、烏の子の胡蝶裝になつてゐる半紙版の本であり、第二の寫本は、やはり烏の子の胡蝶裝で、半紙半載、外題に、傳大納言母上集とある本である。いづれも、奥書はないけれど、字體は相當古雅なものである。この二つの寫本は、各道綱母の哥をあつめたものであるが、おもしろいことには、全文がほとんど、蜻蛉日記の卷末に付してある後人書入れの部分と同じいことである。

即ち、この二書の本文は、

ぶつ名のあしたに、ゆきのふりければ、

年の內のつみけつにはにふる雪のつとめてのよはつもらざらなん

とあるところから、

いはひ

かすしらぬまさごにたづのほどよりは、ちぎりそめけん千代ぞすくなき

とあるところまで約五十首ばかりの歌をあつめたものであるが、道綱母集だけには、終りの所に、特に他本として、別の文が少しく書き添へられてゐる。

右の二つの本は、日記の成立について、いくらか參考になる本である。これ等の本が、道綱母自身のかいたものを傳へたのでないことは、本文の中に敬語を用ひてゐるによつて明かである。例へば、

女院いまだ位におはしましたり、八講行はせ給ひける、ささげ物にはちすのすゝまらせ給ふとて、

とあり、又、

粟田殿見てかへり給ふとて、

とあるによつても分るであらう。このことは、已に多くの古人によつて指摘されたところである。

さて右の二つの寫本を、蜻蛉日記の刊本に比較して見ると、寫本の方がよほど本文のたしかなものがある。日記では意味の通じないところが、こちらでは、すらすらとよまれるのである。例へば、日記の刊本に、

殿かな給ひてりちひさしうありて、七月十五日ほどのことなきこえたまへるつかそ〳〵とよ

かかりけるこのよもしらすいまとてやあはれはちすの露をまつらん

とある所を、寫本には、

殿かくれ給ひてのち久しくありて、七月十五日ほどにのことなどきこえの給へる御かへりごとに、

かかりけるこの世も知らず今とてやあはれ蓮の露をまつらん

とあつて、よく意味が通るのである。右のつかそくいとよといふことについて、契沖は、つるそそによとよみ、又つかは塚敷と想像したりしてゐるが、解環はわりに正しくことにと推定してゐる。

但し、寫本に、殿かくれとあるのは、日記に、殿かくれとあるのあやまりであらう。といふのは、兼家薨去は、永延元年八月二十一日であるのであるから、のち久しくありて七月十五日云々とあるのは、その年のことであり得ないからである。又「きこえの給へる人」がどうしても兼家でなければならないやうに思はれるから、こゝでは、殿かれ給ひてとある方が正しいと思ふ。

この二つの寫本については、又、詳く考へを發表する機會があらうと思ふが、こゝにぜひふれておかなければならないことは、この寫本と、日記との成立上の關係についてである。

傳大納言母上集又は道綱母集は、已に作者自身の編したものでなく、他の何人かによつて輯錄されたものであるとすれば、日記とはいかなる關係をもつであらうか。もと、日記の卷末に附せられてゐたものを、特に切離して、名稱を附したものであらうか。又は、日記とは別に、かゝる家集が傳へられてゐたのを、日記を整理する際に、後ろの方に機械的に綴ぢこんだものであらうか。いづれとも、證據のないことで、斷言は出來ないけれど、私としては後者の推定に從ひたいと思ふ。その故は、日記の本文の終りは、正しい結末をつけてゐないのである。即ち刊本の日記には、

のまゝ

とあるのであるが、このまゝでは意味が通らない。榊原芳野舊藏の本の書入れには、この不明の文字について考證があり「本」といふ字であらうと斷定してゐる。ともかく、これでは、日記の正しい結末ではない。必ず終りの方に脫文があ

（さし歟契沖、解環まのはてなれはよいたうふけてそたたきくなるとに□（たえきき契沖本イナシ契本イ愚云この一字不明なり）に（ナシ契本イ）本

るであらう。佛名云々以下は、その殘欠の日記の終りに、何の用意もなく、ただ機械的に綴ぢこんだものであるとすれば、やはり、前から、さう云ふものが、日記以外に獨立して傳へられてゐたものと考へられるのである。

次に蜻蛉日記をしらべる上に、ぜひとも參考しなければならない書について、二三あげて見ると、次のやうなものがある。

先づ史書として、帝王編年記、歷代皇記、一代要記、皇代記、皇年代略記、榮華物語、大鏡、日本紀略、百錬抄、愚管抄、簾中抄等であり、家記として、小一條記、外記記、天曆御記、伊房記、監要記、小右記等をはじめとして、康保二年記、天延二年記等も一應しらべて見る必要があらうと思ふ。又、水戸彰考館に、道綱卿記一卷があるが、これは、紀略の一條記と同じものであるから、おそらく道綱の書いたものではあるまい。しかし蜻蛉日記を研究せんとする人は、一應見ておく必要があらうと思ふ。

道綱母の事蹟について

一

この章下に於ては、蜻蛉日記の著者と、兼家と、道綱との傳記について少しく考へたい。先づ日記の著者は、作者部類に、右大將道綱母（陸奥守藤原倫寧女）とある人で、この系譜を、尊卑分脈、蜻蛉日記、更級日記等によつて考へると、次のやうになる。

右の系圖にあらはれた父倫寧が、河内、伊勢、丹波、陸奥等の守に任ぜられたことは、大鏡、日記及び長能集に散見する。日記の中に「わがたのもしき人、みちのくへいでたちぬ」とあるのは、倫寧のことであらう。日記卷末の後人の書入れに「同胞の陸奥國の守にて下るを長雨しけるころ、その下る日、晴れたりければ」とあり又「陸奥にをかしかりける所々を繪にかきてもて上りて見せ給ひければ」とあるのは、どうも倫寧のことのやうに思はれる。

長能のことは、作者部類に、五位伊賀守、伊勢守藤原倫寧男、寛弘六年、任伊賀守と見え、長能集によつても、當時、有名な歌人であつたことが知れる。能因が、長能を師として和歌を學んだことは、袋草紙三に見えてゐる。中古歌仙傳に

藤原長能、讃岐介惟岳孫。伊勢守倫寧男、天元五年十月十八日任右近將監、永觀元年二月五日停任、八月十二日任左近將監、二年八月廿七日補藏人、寛和二年同月日兼近江少掾、永延二年八月廿九日任圖書頭、正暦二年二月廿六日任上總介、寛弘二年正月廿七日叙從五位上、治國、六年正月廿八日、伊賀守。

と見えてゐる。この記錄には、長能集の卷末に附した略傳と、少しちがふところがあるが、大體從ふべきであらう。長能集の引くところによると、永觀二年は長能三十六の時であるらしい。して見ると、彼は、天暦二三年の誕生であらう。それ故に、道綱母の兄ではなくて弟である。山岡俊明は、

千載集作者に、なかたふとて入られし、僻事なり。そのまゝながよしと云し事、家集にて見えたり。伊勢守藤原倫寧の子にて、大納言道綱母と兄弟なり弟にてやあらん。妹の君よりは後までながらへしさまに見ゆ。道綱卿の母の書れし蜻蛉日記にも、この人の事はらからと見えたり云々

と云つてゐる。道綱母には、姉も妹もあるのであるが、日記の中に、

かくてあまたある中にも、たのもしきものにおもふ人この夏より遠くものしねべき

ことあるを、服はててとありれば、この頃出でたちなんとす。（中略）われも行く人も、目も見あはせず、唯向ひ居て涙をせきかねつつ、皆人はなど念ぜさせ給はぬ。いみじう忌むなりなどぞいふ。されば車にのり果てんを見んは、いみじからんと思ふに、家より疾く渡りぬ、ここにものしたりとあれば、車寄させて上るほどに、行く人は二藍の小うちぎなり。さまるは、ただうす物の赤朽葉を着たるをぬぎかへて別れぬ。

とあるのは、更級日記の作者の母にあたる人ではないであらうか。

道綱母の名は明かでない。その生年月日も知る由はないが、兼家の通ひそめた天暦八年を、かりに二十歳とすれば、承平五六年の誕生であらう。天暦八年は、兼家廿六歳の時であるから、道綱母に長ずる事、六七歳のほどであつたであらう。

道綱母の傳記は詳しく分らない。類聚名物考卷四十、百人一首一夕話卷五には、少しく事蹟にふれてゐるが、この日記より詳しいものではない。系圖に、本朝第一美人三人内也と見え、顯昭の和歌色葉集名譽歌仙者の條に、

大納言道綱母、東三條入道關白兼家公室藤原倫寧女、本朝古今美人三人之内也

と見えてゐる。尤も、これは寛文の刊本によつたのであるから、はたして正しいものであるか、否かは疑問である。弘長二年壬戌三月十三日巳尅書寫之畢とある本をうつしたらしい内閣文庫所藏の色葉集には、この美人云々の文句がない。（色葉集の考證については他日再び論ずることあるべし）

按ふに、ない方が正しいであらう。

道綱母が本朝三美人之内也といふ說は、いつの頃から起つたものか分らないが、おそらく、鎌倉以後からであらう。三美人について、或ものは、光明皇后、麗景殿女御、道綱母の三人とし、或るものは、衣通姫、染殿后、道綱母の三人とする。これ等はいづれも後世の品定めではあるが、しかし、さう云ふ斷定については、相當の根據があるべき筈で、道綱母は、やはり當時評判の才色兼備の婦人であつたであらう。

道綱母は、寛和二年の内裏歌合に出席したのであるが、このことは、日記卷末の

附錄にも見え、又、拾遺集二夏にも見えてゐる。弟の長能も、同じくこの歌合に出席したのであるが、そのことは、詞花集一春に見えてゐる。

前にひいたやうに、大鏡には、「この君きはめたる和歌の上手におはしければ」とあり、清少納言枕草子にも

またなのとの（前田侯爵家所藏古寫本にはふのとのとあり。いづれにても近やはりさふのとのの方よろしかるべし。）の母上こそは、普門寺といふ所に、八講しけるなきゝて、またの日、小野殿に人々あつまりて、あそびし、文つくりけるに

たきぎこる事はきのふにつきにしなげふは斧の柄ここにくたさむ

とよみ給ひけんこそめでたけれ。こゝもとは、うち聞になりぬるなめり。

とある。

この歌は、拾遺集二十、哀傷に、

爲雅朝臣普門寺にて經供養し侍りて、又の日、これかれもろともにかへり侍りけるつ

いでに、小野にまかりて侍りけるに、花のおもしろかりければ

として、この歌が見えてゐるし、又、蜻蛉日記卷末の附錄にも見え、又、傳大納言母集及び道綱母集にも見えてゐる。この話は、清少納言のやうな勝氣な才女でさへ、これほど感嘆してゐるのであるから、當時、道綱母は、よほど敬慕された有名な歌人であつたであらう。（但し清少納言枕草子の記事についてはなほ考證を要するもの少からず。）

蜻蛉日記は、兼家が通ひそめて、互に和歌の贈答のあつたことに筆を起し、道綱の誕生後、兼家の絶えたのをなげくこと、道綱の成長を樂しめることなど、その記事は、天德、應和、康保、安和、天祿、天延に至るまで、二十一年に亘つてゐる。

兼家は、正暦元年七月二日、年六十二をもつて、東三條第に薨じたことが、榮華物語、日本紀略、公卿補任等に見えてゐる。この時、道綱母は、尼になつてゐたか否かは明かでない。しかし、生きてゐたことだけはたしかである。榮華物語樣々の悅びの卷に、

世のおぼえはじめごろ、かうて一所おはします。あしきことなりとて、村上の先帝の女三宮は、按察の御息所ときこえし御腹に、男三宮、女三宮生れたまへりし、その女三宮なこの攝政殿心にくくめでたきものに聞えさせ給ひて、通ひたまひしかど、すべて疎の外にて、絶え奉らせ給ひにしかば、その宮も、これを耻しきことにおぼし歎きて、うせ給ひにけり。

とある。この三宮保子内親王の薨去は、一代要記に、村上天皇皇女保子、永延元年八月二十一日薨、年三十九、配入道太政大臣、其後出家と見えてゐる。これ等の事情を考へて見るのに、永延元年の頃は、兼家の妻妾たる人々は、すべて死んでゐたのか、或は尼になつて山にこもつてゐたか、いづれかであつたであらう。道綱母は、永延の頃、已に尼になつてゐたのではないかと思はれるのである。

續後撰集卷十釋教に

上東門院御さまかはりて後、八講行はれける棒げ物調じて奉るとて、

となふなる浪の數にはあらずとも、いかで蓮の露にかからむ。

と見え、日記の附錄には、

女院、いまだくらゐにおはしましゝ折、八講おこなはせ給ひけるほうもちに、はちすのすすまゐらせ給ふとて

と詞書してゐる。彰子が中宮に立たれたのは、長保二年二月であつたことが、大鏡、日本記略、一代要記等に見え、受戒せられて、上東門院と號せられたのは、それから二十八年後の萬壽三年であつたことが、右の書及び、今鏡、女院小傳等に見えてゐる。これによると道綱母は、九十歳以上存命してゐたことになる。これは、集の撰者の思ひ違ひで、むしろ、一條天皇の母后東三條院詮子の事である。詮子が剃髪せられたのは、正暦二年のことである。このことは榮華物語は三年のことなどとなす。扶桑略記、日本紀略等は、二年のこ

母におくれ侍りて、又の年のわざなど過ぎて、つれづれに侍りける夕暮に、座つもりたる琴など、おしのごひて、ひくことはなけれど今は程などすぎにければ、なりなりならしけるを、なばなりける人のあひすみける方より、ことの音きければ、物ぞかなしきなど云ひおこせて侍りけるかへりごによめる

亡き人は音づれもせで琴の緒をたちし月日ぞ歸りきにける

大納言道綱朝臣

とあるのであるが、この歌は、日記にも見えてゐるが、道綱朝臣の歌ではなくて道綱朝臣母の歌である。であるから、これは、何の證據にもならない。

道綱母の歿年については、はつきりとしたことが云へないけれど、小右記長德二年五月二日の條に

新中納言道綱亡母周忌法事、送七僧、弼時又、依候大内不訪向之由、自内差致信示送了

と見えてゐるから、その前年、即ち長德元年五月二日にみまかつたものと思はれるのである。尤も、この周忌といふことが、はたして一周忌であるか、否かは、十分疑ふべきことであるが、先づ一周忌と見るのがあたり前であらうと思ふ。今のところ、野府記の記事を信ずるより外、仕方があるまい思ふのである。

長能は、その後なほ存命したのであるが、そのことは、中古歌仙傳に、寛弘六年、伊賀守に任じた記事が見えてゐるからたしかである。彼が、花山院に於て詠じた三月盡の哥を、四條大納言に批評せられ、慚死したほど、それほど、藝術家的觀念に強い人であつたことは、袋草紙に見えて有名である。

道綱の母は、端正にして貞淑な女であつたやうである。兼家から、操を疑はれたことは、前後たゞ一度である。それは、日記の中に、右馬頭が、道綱母の養女のもとに通つて來るのを、兼家が疑つて、文を送ることである。

八月まつ程に、そこに美々しうもてなし給ふとか、世にいふめる。それはしらうゆきもきこえてむかしとあり。たはぶれと思ふほどに、たびたびかかれば、あやしう思ひ

て、ここにはもよほし聞ゆるにはあらずいとうるさく侍れば、すべてここにはのたまふまじきことなりとものし侍ると、猶ぞあめれば、見給へあまりてなむ、さてなでふことにも侍るかな。

今更にいかなるこまかなづくべきすさめぬ草とのがれにし身を

あなまばゆきものしけり。

とあるばかりである。

道綱母は、當時非常な美人であつたらしい。先きに引いた色葉集や、系圖にも見えてゐるがこの日記の中で、天祿元年、大嘗會の御禊を兼家と共に見物した條に、

われも人も、物見るさじきとりわたり見れば、みこしのつらちかく、つつましとおもへば、めくれておぼゆるに、これかれや、いでなほ人にすぐれ給へり、よしあなあたらしなどいふめり。聞くにも物見のすべなし。

と見えてゐるが、これによると、人々が、作者を美人だとほめたことが知れる。

道綱母が、和歌の名手であつたことは、さきに引いた大鏡に見えてゐるが、作歌に際しては、また非常な苦心をこらしたものであるらしい。愚秘抄下に、

道綱母は、くらき所にてよみならひたるとかや。いつも灯火をそむけて、目をとぢて案ぜられ侍りけるとなん。

とあるによつて知られよう。

道綱母は、當時有名な歌人で、後世の人が、いかにその詩才をほめたたへたかは、ほととぎすの歌の品定でも知られる。拾遺集卷二夏に、

右大將道綱母

寛和二年内裏歌合に

都人れてまつらめや郭公いまぞ山邊になきていづなる（今ぞ日記　すぐ日記）

とある歌は、日記卷末にも見え、又、傳大納言母上集にも見えてゐる。この歌は、古今の名歌として、後世の範となつたのであるが、そのことは、清輔が郭公秀歌は

五首也として、貫之、公忠、兼盛實方等の歌と共に、推稱した所である。即ち袋草紙卷三、（異本袋草紙卷下）に、

又云郭公秀歌ハ五首也。而相加能因哥ハ六首云々。件哥ハ

郭公キナカヌヨヒノシルカラバ、ヌルヨモヒトヨアラマシモノヲ

予按之彼五首哥何哉、若貫之ガナク一聲ニアクルシノノメ、公忠ガ山路クラシツ、兼盛ガ曉カケテイマゾナクナル、實方ガクラハシヤマノ郭公、道綱母ノミヤコ人ネテマツラメヤ郭公、是等歟尤不審。

と云つてゐるによつて知れるのである。これによれば、後世に於て、道綱母の歌が、他の多くのすぐれたる歌人と同列にもてはやされたことが、明かに知れると思ふ。

勅撰集にをさめられた道綱母の歌は、決して少くはない。今、作者部類によつて抄出すれば、次のやうである。

右大將道綱母（陸奥守藤原倫寧女）　拾遺　夏一　雜下一　戀四一　賀二　哀一　後拾　戀二　戀四
雜一三　雜二二　雜六一（誹諧、大納言道綱母）　詞花　雜上二　新古　戀四二　新勅　雜一一　雜三一
續後撰　釋一　續古　雜上一　玉葉　春上一　賀一　戀二一　戀四三　雜三一　續千　戀三一
戀四二　續後拾　戀四一　雜中一　風雅　戀一一　新千　戀三一　哀二

と見えてゐる。

この日記は、前にものべたやうに、村上天皇の天曆八年から、圓融天皇の天延二年に至るまでのことを書いたものであつて、その間は、約二十一年に亘るのであるが、しかし、天德二年、四年、應和元年の三ケ年は、どうしたことか、記事が闕けてゐる。

この記事の中絶は、どういふ事情からであらうか。これについて二三の異說が立てられてゐるが、その中で主なるものとして、解環の說をあげると、次のやうである。

愚按ニ天德四年ニ兼家公ノ父九條師輔公逝去。ウタガフラクハ、九條殿ハ健ナラヌ生質ト見ユ。ソレ故病ヅキテ出家シ玉フ。サレバ、其煩ヒ玉フ前年ヘモカカリヌベシ。又後年應和元年ニ至リテモ、イマダ喪ヲ脱セラレザレバ、カレコレ此前後中三年ハ、公ノアリキノ暇モナカルベキナレバ、恐ラクハ本ソノ文アツテ亡失セルニハアラズシテ、本ヨリ自然ノ欠ナルベクヤト推ハカラル。

と中絶の、理由を師輔薨去のために、作者と兼家との關係が少かつたことにおいてゐる。

しかし、これは、色々な點から考へて肯定し難い推定である。即ち、父の薨去のために、作者との間の交渉が少くなるといふ考へも穩かでないし、又、交渉がないから、日記を書かなかつたといふ考へも正しいとは云へない。ことに、應和二年正月、兼家が從四位に叙せられたあたりは、解環の說は非常にあやまつてゐる、又應和三年の記事は、道綱童殿上の事を記してゐるが、尊卑分脈、公卿補任等によると、そのことは、安和二年八月十三日のことである。この年の記事には、必ず大きな錯簡があるにちがひない。全く意味が通らないのである。それ故に、このあたりは、もとあつたものが、散佚して脱落したものであらうと解する考へが、最も正しいと思はれる。故藤岡博士は、脱漏したるにあらずして、はじめよりその要少ければとて記さざりしものにやと、解環の說と同じやうなことを云はれてゐるが、從ひ難い。

次に、この日記は、何時ごろ書かれたのであるかといふ問題については、故藤岡博士は、上卷、中卷、下卷の記事の精粗の點から推定して、次のやうに論じてをられる。

よりて思ふに、上卷はその時々にかけるにあらずして、後に思ひ出でて記せるなるべし。中卷は安和二年、天祿元年、同二年の事、下卷は天祿三年、天延元年、同二年の事にして、記事はこれらの年に至りてはじめて委し。天祿二年、同三年の如きは、殊に詳かに

して、何日に雨降る、風吹く、火ありなど、一々記せるを見れば、これ等はその日〳〵に筆とりしものならん。天延元年に至りてまたやゝ簡略になりぬ。さてこの委しく記せりといふ天祿二年こそ、心安からぬことのみ積りて、長精進を始め、鳴瀧に籠りし年にして、その年のうちに山を出でしが、事のさまなほ面白からず。かくてぞ心やりに物語やうの日記に筆とりそめたるものにて、それにはじめの事をもつけ加へたるものならんか。（國文學全史平安朝篇）

この推定は、あるひは正しいかも知れない。日記が、はじめから終りまで、その日その日に書かれたものでなく、あとから、自叙傳のやうに、思ひ出してかかれたものが多かつたことは、議論の餘地のない所と思はれるのである。

次に、この日記は、いかなる目的でかかれたかと云ふに、別にこれといふ目的があつてかかれたのではなからう。男の書いた漢文の日記は、ある何等かの計畫のもとに、書かれたものであるが、女流の日記は、全く、書かずにゐられないやうな創作欲に刺戟されて筆を執られたものと思ふ。それだけ、宮廷の日錄、公卿の家記等に比べて、藝術的であると云へよう。

土佐日記が書かれてから、假名文の日記は、かなり宮廷に流行したものと見える。それは日記繪の流行を見てもうなづかれようと思ふ。榮華物語つぼみの花の巻に、齊信が村上の御時の日記を、大きな草子四つに書いて中宮妍子に奉つたことが見えてゐるし、源氏物語繪合の巻に、源氏が、須磨蟄居の際に、自ら書いた日記繪を繪合に出した事が見えてゐる。この日記の中に、作者は、「ひとにもあらぬ身の上までかき日記してめづらしきさまにもありなん」と卑下してゐるのであるが、中巻西宮左大臣高明の流刑を記した條には、

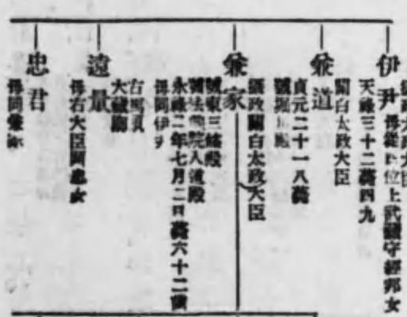
身の上をのみする日記には、入るまじきことなれども、なしとおもひたりしも、たれならねばしるしおく也。

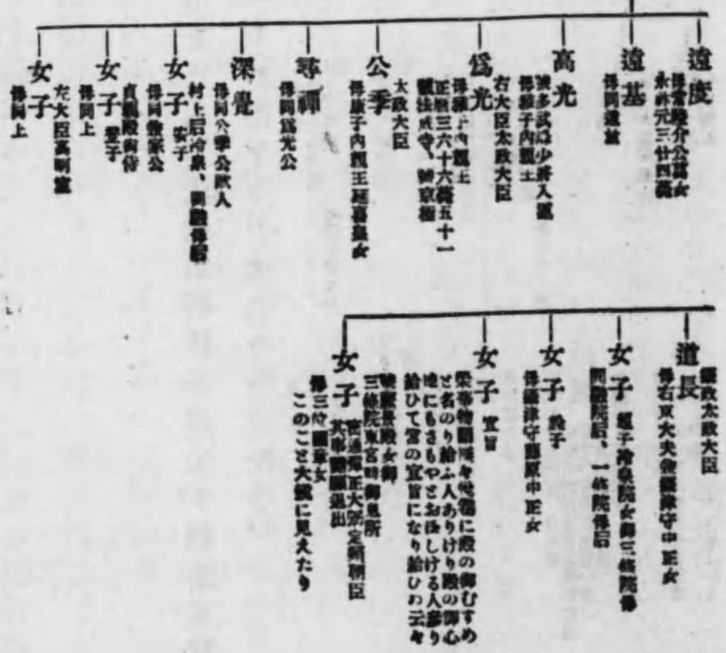
と斷りめいたことを云つてゐる。これ等によつて見ても、作者の心持は推察

され得ると思ふ。

二

兼家の系譜を、尊卑分脈をもととして、大鏡短觀抄系圖、榮華物語事蹟考勘、藤原氏系圖、公卿補任等を見くらべて抄出すると次のやうになる。





道綱母の事蹟について

兼家の事蹟は、大鏡にも榮華物語にも見え、なほ、愚管抄、一代要記、日本紀略、百錬抄、扶桑略記、公卿補任、尊卑分脈等に見え、有名な逢坂山の夢の話は、江談抄に見えてゐる。ここでは、あまり詮索にすぎ、かつ用のないことであるから、すべて省略することにする。

道綱は、蜻蛉日記の著者の生むところであつて、蜻蛉日記流布本の系圖には、兼家の四男となし、尊卑分脈は三男となし、榮華物語事蹟考勘には一男となし、大鏡短觀抄は二男としてゐる。大鏡兼家傳に、

この父おとどの太郎君、女院の御ひとつばらの道隆のおとど、内大臣にて關白せさせ給ひき、次郎君は、陸奥守倫寧ぬしの女の腹におはせし君なり、道綱と聞えし。

とあり、又

大入道殿の三郎栗田殿、又、四郎は外腹の治部少輔の君とて、世のしれものにて、まじらひもせで、やみ給ひぬとぞきき侍りし。五郎君たゞ今の入道殿におはします。

と見えてゐる。尊卑分脈、公卿補任等によつて考へると、大鏡の說が最も正しいと思はれる。即ち、道綱は兼家の第二男である。又、同じく流布本系圖に「道兼、母高二位業忠女、是儀同三司也後拾遺」とあるのは、あやまりで、高内侍が、道隆の母でなくして妻であることは、榮華物語にも見え、古今著聞集好色第十一にも見えてゐる。但し高内侍と貴子との關係については、尊卑分脈に云ふところと、榮華物語に記するところと相違がある。即ち前者には、高内侍は貴子の姉のやうに書いてあるけれど、榮華物語によれば別人ではない。又、勅撰作者部類によれば、高内侍は儀同三司母と同人で、高階成忠女とある。これ等は、榮華物語藤氏系圖が最も正しいであらうと思はれる。次に、同じく流布本系圖に、道長母高内侍と有、とあるけれど、誤りであることは云ふまでもない。

道綱の略傳或は事蹟は、公卿補任、尊卑分脈、大鏡榮華物語等に見え、又、今昔物語にも見えてゐる。後一條天皇の御幼少の時、帝にすすめて、金を砂上にまき、それ

を懐ろにして出たといふ話が續古事談に見えて有名である。

この日記に最も密接な關係のあるものは、兼家の妻妾についての眞相である。兼家の妻妾は、少いといふ方ではない。先づ大鏡に「攝津守藤原中正のぬしの女の腹におはします」とある人の系譜は、尊卑分脈から抄出すると次のやうになる。

房前―魚名―鷲取―藤嗣―高房―山蔭―中正（従四位左京大夫攝津守）
- 爲保（従五下伯耆守）
- 景興（従五下）
- 安親（正三位參議 播伊代守兼尾貴女 長德二三六薨六十五）
  - 茂秀（下總守従五下）
    - 女子（東三條關白妻 東三條女院母）

中正の女の腹に生れたのは、大鏡、榮華物語等によつて考へると、道隆、道兼、道長、超子、詮子の五人であるらしい。蜻蛉日記の中に、子あまたある所など云つてゐるのは、この人のことであらう。道綱母と、この女とは、かなり親しい間であつたやうに思はれる。

次に、榮華物語、樣々の悅びの卷に「大殿のおほんむすめ、たいの御方といふ人の腹におはするをぞ、尙侍になし奉りたまひて云々」とあり、又、一代要記に「尙侍正二位綏子、攝政兼家之女、母故皇太后權大夫從三位國章女也。永延元年九月廿六日任、初入東宮有寵云々」とある人の系譜を尊卑分脈によつて、抄出すると次のやうである。

冬嗣―長良―清經―元名―國章（從三位大貳、皇太后宮權大夫 公卿ヲ任ス永觀三年權ニ非參議從三位兼國章 皇后宮權大夫 六月二十三日八十 天元四年三月五日任 元太宰大貳）
- 景紀（正四下伊賀介 播伊賀守能守女）
- 君章
- 景齊（從四下信濃守 播伊賀守能正女）
  - 女子（是云對御方參新室對方號）
  - 女子（參議從正室 後後朱雀）

對の方には、兼家との間に、姫君綏子がある。綏子は、三條院東宮の御時、御そひぶしに參り、尚侍に任ぜられたけれど、賴定と密通の事があつたので、退出したことが大鏡に詳しい。母の對の方は、榮華物語樣々の悅びの卷に、

たいの御方は、いとやむごとなき人なられど、大貳なりける人のむすめなれいみじうかしづきめでたてあらせける程に、あまりすきずきしうなりて、色好みになりにけるとなむ。

とある。又、その腹の姫君で、三條の宮の御匣殿になつたのは、兼家の子の道兼の女であると榮華物語に見えてゐる。これによつて考へると、對の方は、はじめ道隆の妾であつて、すでに姫君御匣殿を生んでゐたのを、兼家が奪つて、自己の妾としたのであらう。榮華物語抄卷一に、

そのおとうとの女君ニおとうとの君とは、內侍督綏子の妹にて、おなじく母は對の御方也。たゞし、此妹君は、兼家の太郎道隆の子也といふ。此對の御方いろめかしき女とゝ文にいふなれば、兼家にも、道隆にもあひて子を生みし也云々

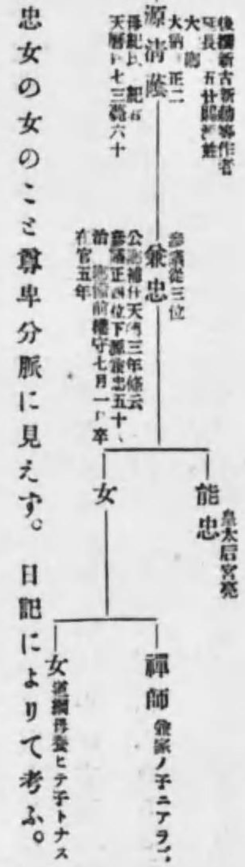
と云つてゐるのでよく分る。尊卑分脈に、この妹君(御匣殿)を、兼家の女としないで、道隆の女となすのは正しい。東宮御匣殿は、實は姉で、綏子の方が、かへつて妹なのであるが、兼家は、自分の子にしたため、逆にして東宮に上つたのであらう。

次に、兼家の妾たりし人に、今一人ある、それは、蜻蛉日記天祿三年二月の條に、

賤しからざらむ人の女子一人とりて、後見もせむ。一人ある人をもうち語らひて、我が命の果にもあらせむと、この月頃思ひたちて、これかれにもいひ會はすれば、殿の通はせ給ひし源宰相兼忠と聞えし人の御女の腹にこそ、女君いと奬しげにてものし給ふなれ。同じうはそれをやはさやうにも聞えさせ給はぬ。今は志賀の麓になむ、かのせうとの禪師の君といふにつきて、ものし給ふなるなど、いふ人あると聞くに、そよや、さは申しありきなむ。故陽成院の御後ぞかし云々

とあり。今この記事を、尊卑分脈と比べて系譜を考へると、おほよそ次のやう

になる。



私云この兼忠女の女のこと尊卑分脈に見えず。日記によりて考ふ。

以上卽ち中正の女、國章の女、兼忠の女の三人と、蜻蛉日記の著者とは、兼家の妻妾として、各々子を生んでゐる。なほ、この外に二三の女ありしことは、日記、榮華物語等に見えてゐる。先づ日記の上に、

さて、九月ばかりになりて、いでにたるほどに、箱のあるを手まさぐりにあけて見れば、人のもとにやらむとしける文あり云々

とあり、又、

出づるに、人をしておひつきて見すれば、まちの小路なるそこそこになん、とまりたまひぬとてきたり云々

とある。この町の小路の女は、いかなる素性の女であるか明かでない。作者が、いみじくにくしと思つてゐる所で、日記の中に、度々その由を云つてゐる。町の女の子を生んだ時にも、

使に人とひければ、男君になむといふをきくに、いと胸ふさがる。

など云つてゐるのを見ても知れる。榮華物語樣々の悅びの巻に、

殿の御むすめとなのり給ふ人ありけり。殿の御心地にも、さもやとおぼしける人まゐり給ひて、宮の宣旨になり給ひぬ云々

とあるのは、この町の女の生んだ女のであるのかも知れない。

なほ又、日記天祿二年正月の條に

かくしも安からず覺えて、いふやうは、このおしはかりし近江になむ文通ふ。さなり、さるべしと、世にもいひ騷ぐ、心づきなさになりけり。

とあるのであるが、この近江は、小野宮の大臣(九條師輔の兄實頼)の召人で、容色の美しい人であつたので、實頼薨後、兼家の通ふ所となつたのであらう。近江との仲らひのことは、日記の中に、しばしば見えてゐる。

次に日記卷末、後人の書添へた所に、

入道殿、中納言爲雅の朝臣の女を忘れ給ひにける日、日かげの絲結びてとて、給へりければ、それにかはりて、

かけて見しすゑも絶えにし日かげ草なにによそへてけふ結ぶらん

とある。この入道殿については、古人の說が一定しないが、たいてい兼家としてゐる。富士谷成章は、伊尹五男義懷としてゐるが、ここではやはり兼家と見る方がよからう。續後拾遺戀四にも「東三條入道攝政かれがれなるさまに見え侍りける比、五節のほどに日かけの糸むすびてとありければつかはすとて、右近大將道綱母」としてこの歌が出されてゐる。

又圖書寮所藏の道綱母集にはたゞまさがたゞすけとある。以上三つの資料から、他の一人の妾が、可能であるが、これ等は猶十分考證しなければならない。今は、あまり詮索にすぎるから、略し度いと思ふ。

兼家の妻妾たる人は、以上の數人の外に、なほ二三ある。榮華物語、花山の卷に、

この殿(兼家)は、上もおはせれば、此女御殿(遵子)の御方に侍ひつゝ、大輔といふ人を、つかひつけさせ給ひて、いみじう思し時めかし、つかはせ給ひければ、權の北の方にてめでたし。院の二三四の宮の御乳母達、大貳のめのと、少輔の乳母、民部の乳母、衞門の乳母、何くれなど、いと多く候ふにも、御めも見たてさせ給はぬに、唯この大輔を、いみじきものにぞ思し召したる。

とあるのがそれである。兼家が、この大輔を愛したのは、晩年のことであらう。これを見ても、その頃は、兼家の妻妾たりし人が、普通のままに生存してゐたとは考へられない。大輔が、兼家の愛を一身に引きうけたことは、榮華物語樣々の悅

びの卷に、

大かた、この典侍より外には、人ありともおぼいたらぬ、年頃の御ありさま也。三四の宮の御乳母どもも、さるはおとらぬさまのかたちなれど、たはぶれに物をだにのたまはせずなんありける云々

とあるによつて知れる。又、兼家が、村上帝の女三宮のもとに通つたことは、前にもあげたのであるが、榮華物語の同じき卷に

村上の先帝の女三宮(保子)は……(中略)この攝政殿、心にくくめでたきものに、思ひ聞えさせ給ひて、通ひ聞え給ひしかど、すべて殊の外にて絶え奉らせ給ひにしかば、その宮も、これをはづかしき事におぼしなげきて、うせ給ひにけり。

と見えてゐる。この三宮への愛を奪つたのは、大輔であつたことは云ふまでもない。

蜻蛉日記にあらはれたる現實生活の破綻と懊惱

一

萬葉や源氏の例はしばらく措いて、一般に完全とは云へない國文古典研究の中で、蜻蛉日記は、とりわけ未完成のものである。古來、わづかに契沖の考證と、坂徵の解環とが殘されてゐるだけである。錯簡誤脫の多いことは、おそらく、宇津保にまさるとも、決しておとるものではない。他日、善本が發見せられて、本文の研究が、一層たしかなものになるのは云ふまでもなく、言語學的、解釋學的の權威ある研究が、將來完成せられて、考證と解環との說を、一々檢討し、その誤謬を訂正して、本文を一層讀みやすからしめるであらう日が、切に待たれる次第である。

今、本文に對するささやかな知識と、淺い體驗とをもつて、蜻蛉日記三卷の前に對する時に、私達は、何かしら大きな未開地の前に立つやうな氣がして、そぞろ〻種の淋しさと、不安と、ものおそろしさとを感じないでゐられない。どこから鋤を入れてよいのか、ほとんど豫想も出來ないやうな、茫漠たる魂の荒野原が、私達の前に、大きく横たはるのである。

しかし、その不安は、とりもなほさず、開拓のよろこびである。處女地の森林にふみ入れる感激であり、喜悅であり、敬虔であり、希望である。それは、生みのなやみでもあり、同時に、生みの悅びでもあつて、新天地開拓の前に立つ如何なる人も體驗するであらう特殊な感激にちがひないと思ふ。

私は、この處女地に對する測量や、調査や、さう云ふものを、ここに求めようとはしない。博物學的な分類や、組織や、統計學的な計量はこの小稿の目的ではない。さう云ふ研究は、又、さういふ方面の眞率な學者の努力に任せようと思ふ。ここには、ただ自己の魂が、その大きな處女地の新鮮な空氣と、日光と、青葉と、雜草との、中を、自由に、無限に、驅けめぐつた銀色の輝やかしい足あとを、そのまま記しとどめて見るにすぎない。

〈蜻蛉日記三卷、その難解の語句を、一字一字たどつて行つて、全卷を讀み終るまでに、ひしひしと身にせまりくる精神は何か？　私達の前には、現實生活の破綻から、あらゆる懊惱に沈める中年の一貴婦人の姿がある。戀愛と結婚とを機緣としてまき上る矛盾と葛藤とは、この貞淑、溫良な一女性を驅つて、愛、にくしみ、嫉妬、執拗、意地と、あらゆる「女性」を體驗させ、つひには、超人間的な實在の力に賴らうとする彼女を、なほそこに安住することを許さず、今一度、大きななやみに投げ入れ、その後「母性」なるものを發見させ、そこで、はじめて「愛」に救はるるに至らしめてゐる。これは、たゞひとり、平安朝の一貴婦人としての道綱母の體驗たるに止まるのではなからう。一層大きな「女性」の永遠の姿でなければならぬと思はれる

のである。

蜻蛉日記三卷、私達に於ては、も早や單なる古典ではない。血の出るやうな切實なる人生記錄（ヒューマンドキュメント）である。「今」に無緣の小話や挿話でなくて、實に生きたる當面の問題である。蜻蛉日記のなやみは、「女性」の永劫のなやみでなくてはならない。あらゆる女性が、いかなる場合に於ても、無關心で過されない彼等自らの大いなる謎であるべきである。

凡そ、作品の筋書を、雜然と羅列することは、さしたる困難の仕事ではないであらう。文學を語るの資格に乏しい人間的なうるほひの少い道學者にも、この仕事だけは可能であらう。しかし、眞の梗概と精神とを、生けるが如くえがき出すことは、容易ならぬ作業であるべき筈である。梗概の把捉は、單に、知的な內容の抽出や、配列でなく、實に、全人格の興奮に基く、一種の創作であり、批評であらうと思はれるのである。

梗概をうかがはうとする精神は、先づ作品の正當な解釋から出發しなければならない。即ち、作者を正しく理解し、作者を自己に體驗した上で、そこから、更に晴朗な批評的精神を照明することによつて、作品の眞精神を、原作に比べて、極めて短い形に再現しなければならない。梗概は、それ故に、具體的に表現せられた批評である。それは、抽象的な思惟と概念に固められた評論に比べて、より生きたものであり、より全一的なものである。從つて、その作業は、單なる考證や、分類や、集成や、評論よりも、より一層困難でなければならない。

一つの作品は、種々な批評を生むと同時に、樣々の梗概をも生むであらう。その各種の梗概には、各種の筆者の體驗內容が、そのまま表現されるのであつて、梗概は、創作或は評論と同樣に、內面に動く自照的なものの姿であると云へる。

文藝による教育の出發は、梗概の把捉であり、その歸着も、亦同樣に、梗概の把捉

であると思ふ。自己の前に示された作品は、永久に變らないであらうが、心につつる作品の姿は、個性の教養の深化、人格の發展と共に、無限に存在すべきである。それ故に、ほとんど梗概のみをもつて成立してゐるこの小稿は、他のより大いなる個性の眼から見られたら、ほとんど兒戯の淺薄に類するものであらう。又、將來、自己の人格の發展の後に、ふと顧みられた時には、ほとんど苦笑を禁じ得ない若年の未熟と獨斷であらう。

二

蜻蛉日記の著者は、前にものべたやうに、系圖には、本朝第一美人三人内也とあり、刊本の色葉集には、本朝古今美人三人之内也と見え、大鏡にも、この母君きはめたる和歌の上手にておはしければとあるが如く、當時才色兼備の立派な婦人であつたことが知れる。蜻蛉日記は、作者と兼家との間に結ばれた戀愛又は結婚の大膽な告白である。

作者は、生れながら地味な、つつましい、どちらかと云へば、淋しい型の婦人であつたらしい。二十の頃、多くの求婚者の中で、彼女の心をとらへたのは、やはり兼家である。

夢のやうな戀愛が深まつて、彼等の結婚の成立したのは、天曆八年の秋の頃である。そこには物語のやうな、夢幻のやうな、生活の陶醉がある。翌九年、二人の間には、一子道綱が生れるのであるが、その頃から、作者の上には、早くも結婚生活の破綻が起りかけてくるのである。

それは、九月の頃のある日のことである。兼家の出たあと、何心なく箱の中を手まさぐりにあけて見ると、そこに、思ひがけもなく見出されたのは、兼家が、他の女のもとに送らうとしてかくして置いたらしい懸想文である。その時の失望と、驚きと、嫉妬とは、彼女の全生涯に亘る深刻な惱みのいたましい誕生である。

十月晦のことである。三夜ばかりひきつづいて兼家の見えない時がある。純な女性にあり勝ちな無邪氣な嫉妬は、男の秘密をあばき出さないではすまされなくなる。そつと人をつけてさぐらせて見ると、男はある町の小路のかくし女の所に泊つたといふ。それから、二三日ばかりの後に、曉方になつて、しきりに門をたたくものがある。さうだなと思ひながら、若い女性らしい嫉妬と片意地とから、彼女はどうしても門をあけようとしないので、兼家は、やむを得ず歸つて行くのであるが、女は、片意地の後の寂寥に堪へかねて、

歎きつつひとりぬる夜のあくるまは、いかに久しきものとかは知る。

といふ哀訴の怨言を送らないでゐられない。

兼家の心が、かうして、段々この女性から去つて行くにかかはらず、女は、怨みながら、歎きながら、やはり、どこまでも引きずられて行かなければならない。兼家の來る日などは、ただわけもなく、物も云はずに、拗ねて見たいやうな氣になつたりする。內裏から退出する時、兼家は、作者の家に立ちよらうとはしないで、よく門の前を咳をしながら通ることがある。さう云ふ時、作者は、堪へがたき孤獨の淋しさとうらめしさとを味ふ。

その頃、同じく兼家の妾であつた仲正の女（契沖に說あれども今は從はず。）のところも、同じやうに絕えたときいて、女らしい感傷から、作者は、自己自らの寂寥を、同性への同情の形に於て哀訴する。かくして、幼き人とただ二人、兼家をうらみながら、淋しく暮らす中、作者は、いつとはなく「母」なるものに眼をさまさうとしてゐる。

天德元年、憎いと思ふ例の町の女が、男の子を生むと聞いて、胸もふたがるばかり烈しい嫉妬に襲はれる。まれに逢ふ日、純な一こくな感情は、若い作者をひどく拗ねさせ、意地張らせ、怒らせる。かうした纖細な感情のもつれには、豪放な兼家も、どうすることも出來ず、たゞ手を空しうして歸つて行く日が度々である。

相撲の頃である。兼家の許から、衣の調製を賴んできた事がある。例の片意

地から、つらあてがましく、一針も縫はないで、即時斷つて送りかへすことが、せめてもの腹いせではありながら、しかも、その後には、必ず淋しいやるせなさが、潮のやうに胸を襲ふのを、どうすることも出來ない。兼家も、また、一寸した浮氣が、これほど女を怒らせるのかと、氣まぐれな男にあり勝ちな、一種の微苦笑と、優越感とをもつて、さまざま、なだめたり、おどしたり、すかしたりする。

秋の一日、作者の家を訪うた兼家は、前栽の花の色々咲き亂れたのを見やりながら、女と互にうらみ言など云ひ交はす。そのはかないいさかひが、段々と昂じてきた末、女はたうとう眞實に男の氣を惡くさせてしまふ。そして、月の出るほど「今夜は歸る」などと男に云はせるまでになつたりするが、しかし、女性らしいやさしい涙が、たちまち男の自負心をくつがへしてしまふ。その夜、兼家は、ぷりぷり怒りながらも、やはり作者の家に泊るのである。

天德二年、にくいと思ふ例の町の女が、子を生んでから、兼家の愛を失つたと聞いて、胸のあくやうな氣がする。女性らしい憎惡と嫉妬とが、この時、はじめて勝利の凱歌をあげる。女性でなくては味はれないやうな、狹小な、纖細な、しかし、可なり慘忍な小氣味よさが、作者の心を淨化する。

道綱はもう四才である。片言などいふほどに成長して、ともすれば「又こんよ」など父のもの眞似をして遊びまはる。それは、兼家が、作者のもとを去る時に、ぐせのやうに云ふ辯解の言葉である。そのうらめしい言葉を、今、無心な幼兒は、無心のままに聞きおぼえて、口眞似をするのである。人間らしいほのかな、そして靜かな涙の笑ひをそこに見る。

結婚生活の破綻から生れてきた淋しい懊惱は、やがて作者をして「自然」に眼を向けさせる。むらむらと細やかに茂る薄の葉を見出でて、たまらない愛着をおぼえたのもその頃である。ゆくりなくもなき出た銀鈴のやうな蜩の聲に、いつにない驚異の耳をそばだてたのもその頃である。兼家と共に、昔の物語をして、

何やらあはれさに堪へず、ただむやみに月に向つて涙したのもその頃のことである。

康保元年、作者は人生の大きな事實に直面する。それは母の死である。母は作者が、この世に於て、最も愛し、また最も頼りとした人である。戀愛と結婚とに失望した彼女は、最愛の母を失つた悲しさに、道綱をつれて山寺にこもる。悲嘆のあまり、死をえらばうとして、情れなき男のもとへうらみの言葉をのこしたりなどする。その頃、作者は、次のやうな感懐をもらしてゐる。

今はいとあはれなる山寺につどひて、つれづれとあり。よる目もあはぬまに、歎きあかしつつ、山づらを見れば、霧ぞげに麓をこめたる。京もげに、誰がもとへかは出でむとすらむ。いで猶みながら死なむ、と思へど、生くる人ぞいとつらきや。

十餘日になつて、僧達がねぶりのひまひまに、耳らくの島の物語などする。なくなりし人のあらはに見え、近よれば消える所と聞いて、堪へ難く悲しく亡き母を思ふ。泣く泣く山寺を下りて里にかへる。かつて、母もろともに上りし路を、今、ただ一人下り行く身は堪へやらず悲しい。久しぶりに家について見ると、母のいませし日、もろともにつくろひおきし庭の草どもが、思ひのままに生ひ茂つて、色々とめづらしい花をさへつけてゐる。無心の草木の上に見出でた「時」の寂しい經過が、彼女のセンチメンタルな哀愁をそそらないでおかない。四十九日の法會などを取り行ふに、讀經の聲を聞きはじめるにつけ、先づ涙にかき暮らされるのは母の思ひ出である。やがて、その日もすぎて、多くの人々が、おのがじし行き分れた後、今まで混雜にまぎれて、それほどまでも氣づかなかつた人亡きあとの淋しさが、急にひしひしと身にしみる。日ごろ、母の使つた調度や、書きのこした文などが、見るともなく目についてて、思はず抱きしめて、さめざめと泣かないでゐられないのである。

康保二年、母の一周忌の法事を、ありし山寺に行ふに、悲しさは堪へ難い。あるべき事などを終つて歸る。忌日などが果てるにつれて、ふと琴をかきならして見たいやうなゆたかな氣になることもある。うつり行く花の色のやうな人の心のはかなさが、たまらなく作者を淋しくする。

この秋、作者は、たのもしき人（兄長能。按ふに更級日記作者の母なるべし。長能かと云へる說あれど、長能は兄にあらず。）の遠くに行くのを送る。衣をぬぎかへたりなどして、二人は泣く泣く別れるのである。それは九月十餘日、月のあはれなる頃である。

三

康保三年、春三月のころ、をば君の病重くなり、山寺にのぼるといふので、人にかつて、さもはかなげに車にのる。をば君なき後、寂しさに堪へず、日に二度三度も文をかいておくることがある。女性らしいやさしさから、ある夕べ、作者はそのをば君を山寺に訪ふのである。夜ふけるまで、二人は、互にうち向つて、しめやかな物語などをする。夜のあけて後、あたりが明るくなる頃、ふと蔀を上げると、日ごろ少しも氣づかなかつた庭の草が、ここではいつのまにか青やかに萠え出てゐる。ゆくりなくも「春」を見出でたよろこびに、彼女は、詩人らしい驚きの眼を見はる。やがて、晝になつて歸らうとすると、をば君は、車のところまで、かつがつ歩み出て、作者を送る。そのいたいたしき有樣は、又なくあはれである。

五月の節句の頃、兼家と雙六をうちつ、勝つて物見に出ることを約す。うらみながら、悲しみながら、しかも、時々、さうした明るい若さと、氣まぐれと、微笑とが、どこからともなく作者の心を襲うて來ることが、作者自らに取つても、不思議のやうに思はれて、そぞろ哀愁の種となる。

秋のほどのことである。はかないいさかひが互に昂じて、つひに兼家の氣を惡くさせてしまつたことがある。兼家は、作者には一口も物を云はず、幼い道綱

をよんで、わざと作者に聞えるやうな聲で「これから、二度と父は來ないぞ」とつらあてがましい事を云つて、ぶつぶつ小言を云ひながら歸つて行く。道綱が、母の胸にすがり、兩親の不和を泣いて訴へるのを見ると、堪へられぬ寂しさにおそはれる。四五日たつても、兼家から何のたよりもないのを見て、さては、先つ日の怒りは、はかない一時の戯れでなかつたのかと、心細くなげく。兼家の使ひふるしたゆ、する、つ、きの水に、塵のたまつてゐるのを見て、しみじみと人間の心のあさましさが思はれる。

康保四年六月、村上天皇の崩御がある。兼家はまもなく藏人頭（尊卑分脈に二日五日兼春宮亮、五月廿三日停任、六月十日藏人頭云々）に任ぜられる。諒闇の悲しみは、表面上のことで、昇進の喜びばかり方々に聞える。現實生活のさうした醜い矛盾が、作者の心を甚しくいたましめて、ふと天皇の御寵あつかりし女御（解環には一條伊尹公の女となせど非なり。契沖が、九條師輔女尚侍登子となすを正しとす。登子のこと、榮華物語、大鏡、大鏡裏書、日本紀略等に見えたり）に同情の和歌をおくる氣になつたりする。

七月、兵衛佐なる人が、山に上つて法師になり、若く美しい妻も、またその後を追うて尼になると聞く。青春を謳ふべき前途ある若人達が、その特權たる戀と地位とをすてて、何が故に山に上らなければならないのか。人の運命の悲しさに堪へずして、和歌をその尼のもとに送る。（解環補遺に高光少將のことなりと云へり。藤岡博士また之に從へど按ふにひがごとなるべし。高光少將出家のこと、大鏡及び榮華物語に見え、大鏡裏書、三十六人歌仙傳、多武峯略記等には應和元年出家せし由見えたり。多武峯少將物語及びその考證に詳し。今兵衛佐とは、何人なるや明かならず。なほ考ふべし。）

安和元年九月、初瀬に思ひ立つ。十五年の結婚生活の生む矛盾と懊惱とが、作者をして新しい安住の世界を求めしめ、大きな力への歸依と、漂浪の旅とに向つて、一種の憧憬を抱かしめたのである。行きかふ舟、梨などなつかしげにもつて食ひなどする下衆、切大根の汁、物語の如き小家、霜白き朝、立ちわたる霧、湧きかへる水、乞食、いみじげな盲の、あたりに人の立聞くのも知らず、身の上のことを包むところもなくしやべるあさましい姿。いづれも靜かなる寂しさである。

安和二年、現實生活の矛盾をなげきながら、なほ、何かしらほのかな希望を胸にひめて、新しき年を迎へる。兄と共に、ことといみなどして、たはぶれるほどのゆつとりとした氣になるのも、我れながらあはれである。三月三日には、節句などを試み、ここかしこの人々を招いたりなどする。

三月二十五六日のころ、西の宮の左大臣高明が、流罪に處せられるといふ大きな事件が、作者の胸をかき亂す。對立する權力の爭鬪の犧牲となつて、はかなく沒落して行くこの貴族のために、作者は心からなるあつき同情の涙をそそいでゐる。（左大臣源高明流罪のこと榮華物語月宴に見え、又大鏡、公卿補任、扶桑略記、日本記略、百錬抄等にも見えたり。）

「六月十五日、兼家は御嶽詣を思ひ立ち、道綱を具して出發する。愛兒の初旅の行末が、彼女をして「母性」を體驗せしむる機緣となる。道綱が、無事に歸つて來た日、彼女は、はじめて安らかな眠りと夢とを惠まれる。作者が、かうして次第に母性に深まつて行くことは注目すべきである。

天祿元年、三月十日のほど、內裏に於て、賭弓のことがある。道綱もえらばれてその技に加はる。それは、月のまことに明るい夜のことである。賭弓の勝負はどうであつたであらうと、待ちわづらふ程に、道綱の勝つたこと、見るも涙ぐましい程美しく舞ひをしたこと、さうした吉報をもたらす人がある。作者は、その夜、「子」をもつ有難さと、「母」たる身の喜びとを、しみじみと體驗するのである。（日本紀略天祿元年三月十五日條云、兼家卿息、童舞能心已得骨法、仍主上給紅染單衣云々）その時の心持を、日記には、

ありつるやう語り、我おもてをおこしつること、上達部共のみな泣き、らうたがりつることなど、かへすがへすも泣くなくかたる。弓の師よびにやりきて、又ここにて、何くれとて、やや、かづくれば、うき身かともおぼえず。うれしきことぞものに似ず。そのことの後、二三日まで、知りと知りたる人、法師に至るまで、若君の御よろこび聞えにきこえにと、おこせいふを聞くにも、あやしきまでうれし。

蜻蛉日記にあらはれたる現實生活の破綻と懊惱　七七

その後、兼家の通ひ來る日は益々まれになる。見えぬ夜は三十夜、晝は四十日に及ぶ。うらみながらも、やはりかうして來ぬ日を數へて見なければすまされない淋しい彼女の心である。

來ぬ人をうらみつつ、六月唐崎に祓へに向ふ。かたぶく月影の京をあとに出で立つ。加茂川のほとりを行くに、ほのぼのと夜があける。青葉のしげみの中を行く空車、棟の木の下に座して開くわり子、日の暮れかかる山路で、おびえるやうに関をつくる蜩の聲、そこには、いづれも作者でなければ味はれない自然への深い凝視がある。日が暮れて、京にかへると、家の從者どもは、松明をともして、遠くまで迎ひに來てゐて、この晝、殿(兼家)のおはしましたる由を告げる。自分の留守を見こんで來たのではないかと、意地惡く邪推されるのも、我ながら淋しい。

春のころ、つれづれなるままに、つくろひ植ゑた草などが、すくすくと生ひひろがり、暗くなるまでに茂りみちたみづみづしい生の輝きを見るにつけ、そぞろ涙ぐましい感激をおぼえる。

つれなき人を怨じて明し暮すほどに、ふと兼家の來た日がある。「お前を見限ってしまふなど、そんな馬鹿なことがあるものか。あすあさての程、必ず來る」などなだめて歸る。正直にその日を待つてゐるが、浮氣な兼家は更に尋ねて來ない。無力な女性の執拗と怨恨とは、やがて男性への哀訴に變る。

されば、よ、と思ふに、ありしより、げにものぞ悲しき。つくづくと思ひつゞくることは、なほいかで心として、祈るにも死にしがなと、思ふより外のこともなきを、ただこの一人ある人を、思ふにぞ、いと悲しき。人となして、うしろやすからむなどに、あつけてこそ、しかも心やすからむとは思ひしか。いかなる心地して、さすらへむずらむ、と思ふに、なほいと死にがたし。いかがはせむ、形をかへて、世をおもひ離るやと、心みむと、語らへば、又ぶかくもあらぬなれど、いみじう、さくりもよよとなきて、さなり給はば、まろも法師になりて

こそあらめ。何せむにかは、世にもまじらはむとて、いみじう、よよと泣けば、われもえせきあへねど、いみじさにたはふれに云ひなさむとて、さてもたかがはてば、いかがし給はむずらむと云ひたれば、やをら立ちはしり、手に据ゑたる鷹をにぎりはなちつ。見る人も、涙せきあへず。

七月亡き母の盆の事を行ふ。その頃兼家からねんごろなる文がある。その あつい志が、あまりにも怪しくて、他にみそか女でもあつて、その口實で、かう親切にするのではないかとさへ疑はれたりする。

なやみに堪へず、石山に十日ばかり思ひ立つ。その心は、何か一種の反抗めいた、つらあてがましい心である。ありあけ月の淡い光をたよりに、加茂川のほとりを走りながら急ぐ。河原に死人がころんでゐるといふ恐ろしい噂も、その日にかぎつて、少しもおそろしくない。それ程、彼女は興奮してゐる。途中、若狭守が、前驅を仰山さうに追ひののしりながら、さも得意げに上るのにあふ。これに對して、嘲笑的な、反抗的な感じさへ起る。

二十日ばかりの月かげの色、鹿の聲、秋のけはひ立つ石山の風情は、作者の心をいくらか和げたやうに思はれる。ある夜、曉方にまどろむと、寺の別當とおぼしき法師が、銚子に水を入れて右の方の座に入るといふ夢を見る。み佛の見せ給ふかと思ふに、ましてあはれに悲しい。

やがて歸る日が來る。人の世をすて、み佛の前を求めてきながら、今再び後ろに見すて奉りて、人の暖かさを求めて、立ちかへる心のはかなさが、彼女の胸をかぎりなく淋しくする。

明けぬといふなれば、やがて御堂より下りぬ。まだいと暗けれど、うみの面白く見えわたりて、さいふ〳〵人二十人ばかりあるを、乘らんとするふねの、岸かげの方へばかりに、見下されたるぞ、いとあはれにあやしき。みあかし奉らせし僧の見送るとて岸に立てるに、たださし出でにさし出でつれば、い

と心細げに立てるを見やれば、かれは目なれたるらんところに、悲しくやとまりて思ふらむ、とぞうる。男子ども、いまこん年のふん月ともなひ參らむよとよばひたれば、さなりと答へて、遠くなるままに、影のごと見えたるも、いと悲し。空を見れば、月はいと細くて、影は海のおもてにうつりて、あま風うちふきて、うみのおもていと騒がしうきらきらとさわぎたり。わかきをのこども、聲細やかにて、面やせにたるといふ歌を、うたひ出でたるを聞くにも、つぶつぶと涙ぞおつる。

これは、日記の中でも特に白眉と思はれる一節である。曉のうす闇の中に、灯をかかげて立つ白衣の僧、舟の遠ざかるままに、影の如くいつまでもぢつと心細げに立つその姿、作者でなければ見ることの出來ない深い人生の寂寥と靜寂とである。

相撲の日、兼家はいつものやうに道綱を車にのせず、ただ車の後りにのせて歸つてくる。その待遇の冷酷さに、作者はかつとのぼせ上るやうないきどほりを感じたりする。

十一月、道綱元服のころ、兼家の心ざしは、又しばらくねんごろなやうすである。作者はそこではじめて昔にかへるやうな心地がする。これまでの怨みも、憎しみも、ねたみも、結局男性への哀訴の外の何物でもなかつたのである。しかし、その喜びは、やはり、はかない夢にすぎなかつた。兼家のしげく通ふ日は、いくばくもなく、再び絶えてしまふのである。一人出で、一人歸つてくる淋しい道綱の姿を見ると、作者はそぞろ愛兒の父なる人の無情をうらまないでゐられない。

十二月、何のおとづれもなくて十七八日にもなつたころ、どうしたことか、兼家が突然尋ねて來た。その姿を見ると、悲しさと、なつかしさと、恨めしさと、うれしさと、云ふに云はれぬもつれた心から、作者は、まだ一言も口をきかない先きに、涙がほろほろと頬を傳ふのである。丁度幼い子供が、しばらく旅にゐた父が歸つ

てきたときに、ただわけもなく父の胸にすがつて涙を落すであらうやうに。

四

天祿二年、正月の朔には、いつの年も必ず來る例であつたのに、今年にかぎつて兼家は來ない。ひつじの時ばかり、前驅してわが家の前を通るけれど、彼はどうしたのか立ちよらうとしない。近江といふ女のもとに通ふといふ噂さである。車の通る毎に、兼家ではないかと胸がどきりとする。二日ばかりして兼家が來たけれど、岩木のやうに取り合はず、一口も物を云はないでその夜を明す。兼家は、あくる朝、默つて起きて、そして默つて歸つてしまふ。

二月、呉竹を庭にうゑる。二日ばかりして、雨風に、一筋二筋うち倒れたのを見て、それを淋しがる程、彼女は感傷的になつてゐる。兼家から、時々たよりがあつても、それに對して、返事をしようなどといふ氣は更に起らない。返事をしたくないのではなくとも、何とはなしに拗ねて見たいのである。怨むことによつて、拗ねることによつて、はかない、そして切ない愛に近づかうとするのである。

四月、道綱と共に長精進をはじめようと思ふ。その頃、彼女は、どうかすると、非常に感傷的になることがある。疾く死なさせ給ひて、菩提かなへたまへと、佛を念じたりすると、自分の言葉に、自分で興奮して、われ知らず、ほろほろと涙をこぼす。その頃、作者はよく不思議な夢を見ることがある。五月雨のころ、行ひのひまに、草花をほつて、それをここかしこに配る。例の美しくやさしい心からである。

六月、西山にわたらうと、家の中を片づけなどするに、紙に包んで忘れておいた藥を、ふと疊の下に見出したりする。はかないことではあるが、深く彼女の心を動かす。兼家から、話し度いことがあるから、しばらく待つてゐてくれとたよりがある。けれども、例の片意地から、無理やりに、逃げるやうにして京を出る。彼

女に於ては、兼家を遠ざかることは、又兼家に近づく唯一の道でもある。愛すればこそ憎み、愛すればこそ拗ねる彼女である。

山寺にこもつて、ありし日、兼家と共に遊んだ事を思ふと、そぞろ淋しくて、涙ぐまれる。時のかひが四つなるころに、兼家は自ら車にのり、火をともして、作者を迎ひに來る。切に歸京をすすめるけれど、作者は例の意地をはつてどうしても聞かうとしない。兼家は、たうとう腹をたてて、ぷりぷりしながら歸らうとする。道綱は、仲たがひをした父と母との間に立つて、見るもいたましいほど千々に心をくだく。そのやるせない胸中を思ひやると、作者は絶え入りたいやうな寂しさと悲しさとに襲はれる。

ありきつる人は、御送りせむ。御車のしりにてまからむ。さらに又まうで來じとて、泣く泣く出づれば、これをたのもし人にてあるに、いみじ〻もいふかな、と思へども、物いはであれば、人など皆出でぬと見えて、この人はかへりて、御送りせむと申しつれど、汝は、よばむ時にを來とて、おはしましぬとて、よとなく。

京よりをば君がたづねてくる。もろともに語らつて、五六日經るほどに、月は美しうさかりになる。ほたる、ほととぎす、くひな、入相の鐘、蜩、讀經、物思ふことは甚だ多い。ある日、道綱を使に京へやる。その後に、物すごい雷雨が襲うてきて、ごほごほと鳴る雷鳴はすさまじい。母らしいやさしさから、道綱の安否が氣遣はれてたまらない。

ある日、たのもしき人（契沖は長能歟と云ひ、解環は倫寧と云へり。）が來て、無理やりに作者を車にのせて京にかへる。以後、淫落な兼家は、たはむれに、作者をあまかへるなど云つて冷やかしたりする。尼かへるの意である。

現實生活の矛盾になやむこの貴婦人は、いくばくもなく、再び初瀬へと思ひ立つ。この旅では、とくに鵜舟が彼女の興味を引いたらしい。

十月二十日のころである。ふと外を見出せば、屋根の上に、霜が非常に白く下りてゐる。自然のこの推移は、彼女に於ては、も早や、無心ですごすことの出來ないものになつてゐる。童たちが、霜腫をまじなふと云つて、騒ぎあつてゐるのも今は、彼女にとつて、涙ぐましい見ものでさへある。

十二月、雨の烈しくふる日である。今は、互にうとい仲ではありながら、兼家は、なほ、さすがに忘れ難い唯一の人である。戀しさに堪へず、雨をおかして、文をやると、まだその使が行きつかない頃に、引きちがひに、兼家が來る。「ひどい雨だ。平素の立腹は、今夜の功德で許してもらひ度いものだ」などたはむれて云つたりする。うらみながら、そしてほろほろと涙をこぼしながら、作者はその兼家のおどけた言葉に、思はず笑ひ出さないでゐられない。

天祿三年の正月である。道綱は十八といふ美しい年を迎へる。うるはしく裝束させて、拜賀に出す時に、すくすくと成長した愛兒の後姿を見ると、むらむらと湧き上る母らしい愛の發作から、いきなりぢつと抱きしめたいやうな心になつたりする。作者は、今年は、いかなることがあつても、兼家のことを思ひあきらめようと心に誓ふ。

二十五日、つかさめしに、兼家は大納言になる。喜びなど云ふ人もあるけれど、作者にとつては、かへつて皮肉に聞えて、少しもうれしいとは思はれない。作者に於ては、兼家の地位の昇進することよりも、兼家の愛を得ることが、より大切な望ましい事である。しかし道綱は、骨肉の間だけあつて、さすがに父の昇官を心から喜ぶ樣子である。その切實な恩愛の情が、作者の胸に、しみじみと寂寥をそそる。（公卿補任天祿三年の條に、權大納言正三位藤兼家、正月廿日任、右大將如元、とあり。この日記二十五日に作るは後より聞きて書きたるがためなるべし。）

三月、春雨ののどやかにふる日である。何心なく庭を見出せば、今まで少しも氣がつかなかつた庭の面に、いつのまにか、朽葉の下の若草が青みわたつてゐる。「春」を彼女はそこに見出したのである。

家庭生活の破綻に誘因された惱みに堪へずして、魂の安住を我が子の愛と、みほの慈悲と、自然の感動との中に追求した作者は、この頃、別な方面に興味の眼を向けるやうになる。それは養女のことである。かつて、兼家の通つたことのある源宰相兼忠の女の腹に、美しい姫君のあるのをきいて、その姫君を迎へて養女にしようと思ひ立つのである。何も仔細を知らない兼家は之をきいて「自分が年をとつたものだから、若い人を婿に取つて、捨てようといふ了簡だな」などいやみを云つたりするが、後に、その養女が、かつて、自分の生んだ女の子であると知つたときに、さすが豪傲磊落な兼家も、むらむらとこみ上げてくるなき人への思ひ出にたへず、いきなりさめざめと熱い涙を流す。この深刻な人間の悲劇の前に、作者は、今までの嫉妬も、偏見も、敵意も、あらゆるものの一切を忘れ、思はずもらひ泣きをしてしまふ。

いといみじきことかな。今はふれ失せにけん、とこそ見しか。かうなるまで、見さりけることよとて、うちなかれぬ。この子も、いかに思ふにかあらむ、うちうつふして泣きゐたり。見る人もあはれに、昔物語のやうなれば、皆なきぬ。

そのころ、うららなる日がつづく。すべてのものが「自然」といふ慈母の懷ろの中で、めいめいはちきれるやうな生を歡喜してゐる。

この頃空のけしきなほり立ちて、うららとのどかなり。あたたかにもあらず、寒くもあらぬ風、梅にたぐひて、うぐひすをさそふばかりの聲など、樣々和ら聞えたり。屋の上を眺むれば、巣くふ雀ども、瓦の下を出で入りさへづる。庭の草、氷に許され顏なり。

「彼女に於ける「春」は、も早や單なる暦の上の春ではない。萬物すべて一種の和みの中にとける駘蕩の春であり、柔かな陽の光の中に、瓦の下を出入りしてさへづる雀の歡びに於ける春である。自然に對する作者の抒情詩的な眼が、かうし

て益々透徹して行くのを見るのは、むしろ驚きでさへある。

この頃石山の法師のもとから、祈禱をし度いと云つて、よこすのに對して、返ごとに

今はかぎりに思ひはてにだる身をば、佛もいかがし給はむ。ただ今は、この大夫を、人人しくてあらせ給へなどばかりを申し給へ。

とばかり云ひやる程、彼女は現實的な希望をうちすてて、ひたすら、道綱への愛に生きようとするのである。

六月、朝の日影のまぶしくさす一日である。はかない人生の一挿話にも、彼女に於ては、そのまま見逃し難い深い意味が見出されることがある。

ひんがしおもての朝日のげ、いと苦しければ、南のひさしに出でたるに、つつましき人のけ近くおぼゆれば、やをらかくれふして聞けば、せみの聲いとしげうなきにだるを、おぼつかなうて、まだえ身をやしなはぬ翁ありけり。庭はくとて、箒をもちて、木の下に立てるほどに、にはかにいち早うなきにければ、おどろきて、ふり仰ぎて云ふやう、よいぞよいぞといふてなく蟬、木にをるは、虫だに時節を知りたるよと、ひとりごつにあはせて、しかじかとなきみちたるに、をかしうもあはれにもありけむ心地ぞあぢきなかりける。（本文解環による。愚考あれどここに省く。）

この翁は、更級日記にあらはれて來るやうな、一種の幻想的な存在であるところに、云ふかぎりない興味があらうと思はれるのである。

五

天延元年二月、紅梅は常の年よりも色こく咲く。もろともに見る人もない身は、うらめしく淋しい。道綱にその一枝を折らせ、父のもとに送らせる。作者は、このころ兼家を忘れよう、忘ようと努力をつづける。

九月、中川に於ける自然の美は、彼女の心をなぐさめる。

九月になりて、未だしきに、格子あげて見出したれば、うちなるにも、外なるにも、川ぎり立ち渡りて、麓も見えぬ山の見やられたるも、いと物悲しうて、

ながれてのとことたのみてこしかどもわが中川しあせにけらしも

とぞ云はれける。ひんがしの門の前なる田どもかりはて、ゆひわたしてかけたり。たまさかにも見えとふ人には、青稻からせて馬にかひ、やい米せさせなどするわざに、おりたちてあり。こたかの人もあれば、たかとも外に立ち出でて遊ぶ。

その頃の作者は、も早や兼家を思ひあきらめてしまつてゐるかのやうに見える。兼家から冬の衣、或は下襲の調製を乞うて來ることもあるが、も早や、すげなく送りかへすほどの反抗心も、またそれに伴ふ愛着心もなくなつてゐる。彼女は、乞はれるままに、すべてを調へて送りとどける程、それほど世間なみな柔順とあきらめの境地に生きてゐる。

十二月のころ、田上に詣でたことがある。祓殿にはつららがおびただしく下つてゐる。一重の袖に氷をつつんで、喰ひながら行く男がある。作者の連れの人が、ふとその男に物を云ひかけると、氷を口一つぱいに頬張つた聲で「まるをのたまふるか。かしらついてこれ食はぬ人は思ふ事ならざるは」など云つたりする。何か大きな神祕を啓示するやうな口のきき方で、つつましい作者には聞きすてがたい言葉である。

天延二年、正月十五日、道綱の雜色の男の子達が、儺をして騒ぐ。その聲の面白さにさそはれて、端の方に出て見ると、大きな月が東の空に出てゐる。ふと兼家のことを思ひ出す。八月から絶えて正月にもなつた彼の人を思ふと、今はあきらめ捨てた身ではありながら、なほ未練の涙にかきくらされる心地である。

二月、作者は「男性」といふもののあさましさをつくづくと體驗する機會に達す

る。それは、右馬頭（今按ふに、此人日記によれば道綱の叔父也。兼家の異母弟右馬頭遠量のこと歟。道綱天延二年正月二十九日右馬佐に任じたる由見えたり）なる人が、早くも作者の養女に懸想をして云ひよつて來たことである。まだ十二三のいたいけな少女に目をかけて、とやかく騷ぐ男の氣まぐれと、浮薄とに對して、あくまで弱きもののために戰はうといふやうな一種の反抗的な氣分が、作者の胸中にむらむらと起つてくるのである。

七八日のほど、晝つ方に頭自ら作者のもとを訪ふ。物語りめくほど美しい姿である。その時の描寫に、

ついたち七八日のほどの晝つ方、右馬頭おはしたりといふ。あなかま、ここになしと答へよ、そのいはむとあらむに、まだしきに便なしなど云ふ程に、入りてにはなる簾の前に立ち休らひ、例も清けなる人の、ねりそしたにきて、なよよかなる直衣、太刀引きはき、例のことなれど、紅色の扇少し亂れたるをもてまさぐりて、風早きほどに纓ふき上げられつつたてるさま、繪に書きたるやうなり。清らの人ありとて、奥まりたる女等の裳などうちとけ姿にて出でて見るに、時しもあれ、この風のすだれを外へ吹き、内へふきまどはせば、簾を頼みたるものも我か人かにておさへひかへさわぐまに、何かあやしの袖口もみな見つらむと思ふに、死ぬばかりいとほしく、よンべ出居の所より、夜ふけて歸りてねぶりたる人を、おこすほどにかかるなりけりからうじて起き出でて、ここには人もなきよし云ふ。風のここちあわただしさに、格子皆かねてより、下ろしたる程になれば、なきといふもよろしきなりけり。しひて簀子に上りて、今日よき日なり。わらふたかい給へ。ゐそめむなどとばかりかたらひて、いとかひなきわざかなと、うちなげきて歸りぬ。

養女と右馬頭との戀愛事件は、作者にとつては一つの慘忍な興味でさへもある。作者は、色々口實を設けて、右馬頭の求婚を邪魔しようとする。そして、「昔いかなる罪をつくりてか、かう妨げせさせ給ふ身となり侍りけむ」など、怨み言を云

はせたりする。そこに、若い男に對する中年の婦人の慘虐と、征服感と、自己滿足とがある。爾後、しばらく、作者の興味は、この可憐な養女の上に向けられる。そして作者をして、

見る人は、なほいとうら若く、いかならむと思ふことしげきにまぎれて、わが思ふことは、今は絶えはてにけり

と、うつり行く心の姿を告白させてゐるのである。

十一月、臨時の祭の日である。戀愛と結婚との生活に失望したこの貴婦人は日頃のうさをはらさうために、多くの人々に交つてひそかに物見に出る。きらびやかな兼家の姿を、よそ目で、そつとかいま見たりするが、もう昔のやうな乙女らしい嫉妬や、片意地や、反抗などの心は起らない。それだけ彼女は平凡になり圓滿になつてきたのであるが、しかし、それだけ人生の深さに徹したとも云へよう。

その日、道綱は、供人などをきらきらしくさせて、いかにも貴公子らしく振舞つてゐる。多くの上達部達が、さも道綱に媚びへつらふやうに、手毎に菓物などさしでて、しきりにお上手を云つたりする。かう多くの人々から取り圍まれて、榮え榮えしく振舞つてゐる美しい若者を見ると、これが自分の生み、育ててきた男の子であるかと、誰かに強ひて吹聽でもして見たいやうなおもただしさを感ずる。又父の倫寧も、その日、こつそり物見に交つて遊びに來てゐると、父を見知つてゐる宮人達が、目ばやく姿を見つけて、雜踏の中を分けて父をとらへて、酒など強ひてすすめたりする。老いたる父が、かくも衆人の中で面目をほどこしてゐるのを見ると、うき身ながらさすがに肩身がひろいやうな氣になつて、思はず人間らしい靜かな涙に頰をぬらすのである。

わが思ふ人にはかに出でたる程よりは、供人などもきらきらしう見えたり。

上達部手ごとに菓物などさし出でつつ、物云ひなどし給へば、おもただしき

心地す。又ふるめかしき人も、例の許されぬことにて、山吹の中にあるを、うち知りたる中に、さしわきて、とらへさせて、かのうちより酒など取り出でたれば、かはらけさしかけられなどするを見れば、ただその片時ばかりや、行く心もありけむ。

以上は、蜻蛉日記三卷の簡單な梗概である。私に於ては、むしろ、これは批評であるといつた方が、適當なのかも知れない。

六

以上、私に於ける蜻蛉日記三卷のあるがままの梗概をのべてきたのであるが、最後に、――或は蛇足であるかも知れないけれど――この日記に對するまづしい感じを附記して見ようと思ふ。

新婚の陶醉の夢が次第にさめて、現實の矛盾がひしひしとせまつて來る時に、すべてに對して盲目的にはすまされないこの純眞なる一婦人は、ゆくりなくも大いなるなやみを經驗する。それは忘れられて行くものの淋しさである。愛を獨占せんとするものの焦慮である。

この二つのなやみは、彼女が純であればあるだけ、彼女の理想が高くあればあるだけ、そのままにはすまされない渦卷を內面の生活に引き起すのである。それは、ある時はつつましく根强い怨恨となることもある。又或る時は、はげしい嫉妬となり、片意地となり、反抗となり、面あてがましい執拗となることもある。又或る時は、はかない怨み言となり、子供のやうないさかひとなる事もある。又或る時は、几帳のかげに、われと我が身にひそと訴へる涙の獨語となることもあり、又或る時は、男性のたくましき胸に取りすがり、心ゆくばかり泣き沈むいたいたしい哀訴となることもある。

現實生活のこの矛盾と破綻は、彼女に於て、そのままでしのび難い苦痛である。

がそれにもかかはらず、その苦痛は、一面になくてはならない興味ある苦痛でさへある。惱むことによつて自らを慰めるのは彼女に於ける一種のパラドックスである。尼とならうとして、やはり人間の世の暖かさを慕ひ、死をえらばうとして、やはり生に未練をのこす。生は望ましからぬものではありながら、死はなほより一層ものおそろしく忌むべき苦痛である。矛盾があつても、苦惱があつても、人間生活は、やはり親しむべく愛すべきである。

外的生活の表面に波うつ幻影を追うて、その新奇の中に安住するには、彼女はあまりに批評的である。彼女は、いつでも、事象の奥に輝く永遠なるものを凝視する。そこには、純粋なるものへの牧歌的な哀歌的な憧憬がある。人間の眞實と、自然の素朴へとの愛が、女性らしい一種のセンチメンタリズムの中に、油然として流れ出づるのである。

愛兒道綱が、まだいとけない程に、ともすれば、今來んよ、今來んよと、口癖のやうに父の言葉を眞似て遊ぶ純眞。母みまかりて後、事など果て、人々の互に行き分かれたあとに、しみじみとよせ來る寂寥。をば君の病む日、山寺に上るとて、人の肩にかかりながら、はかなげに車に乘る時の哀愁。兵衛佐が山に上つて法師になり、その妻も後を追うて尼になるときくときの感傷。道綱が御嶽詣に旅立つたあとの母らしい心づかひ。又道綱が賭弓に勝ち、めでたう舞などした時の狂ほしい喜び。元服した道綱のうるはしい姿を見る時の涙ぐましさ。祓殿につらの垂れる寒い朝、氷を袖に包んで食ひながら行く男に對するなつかしみ。臨時の祭の日、ひそかに物見に交る父の倫寧が、人々に見出され、酒などすすめられるさまを見る榮え榮えしさ。それ等は、永遠に、そして純粋に人間的なるべき感情でなくてはならない。ただひとり道綱母の體驗に止まらず、時と所とを超越した人間性の尊い眞實である。彼女の心を引きつけたものが、かくの如く、めぐましい破天荒の大事件でなくて、いづれも小さなそして地味な人生のエピ

ソードであるところに、藝術家としての彼女の眞面目がなければならない。

純粹なるものを內的に追ふ心は、時としては、外的な權威に對するつよき反抗となることもある。左大臣源高明が流罪に處せられ、北の方の尼になり給ふ時の同情、兼家の官位昇進して、きらきらしくふるまふ時の一種の憎惡と反感、若狹守のおどろおどろしう前驅しののしつて行くさまを見る時の嘲笑、それは、協的な卑屈な個性には見ることの出來ない高いそして强い心である。

「永遠を思慕する心は、又自然に沈潛し透徹する心でもある。彼女は、くれ行く薄明の空に、すきとほるやうになき出でた初蜩の聲に驚異の耳をそばたてる。すくすくと茂りひろごる雜草の野趣と清新とに魂をふるはせる。彼女に於ける「冬」は、とある朝、ゆくりなくも見出でた屋上の霜の色である。おそろしほど垂れ下る軒のつららの光である。彼女の「春」は、庭の朽葉の萌え出づる綠である。屋根に巢くふ雀が、瓦の下を出で入りして囀る聲のにぎやかさである。胸毛をそよぐ風のあたたかみである。かげらふのうららかさである。

「道綱母が、永劫に誇るべき名譽は、單に解環のいふやうな貞操と才色とに止まらない。實に彼女の藝術的な觀照の深みと、魂への眞率な凝視と沈潛と、人性への大きな愛とである。」そして、蜻蛉日記三卷は、藝術の何物たるかを正當に理解する——といふよりも、藝術を無限に思慕する新しい學者によつて、今一度、眞摯な態度と精神との中に考へなほされなくてはならない作品であらうと思ふ。」

この小稿は、蜻蛉に對する自らの小さき感じを、少しくのべたにすぎない。蜻蛉日記には、なほ精密に研究考察すべき幾多の問題が殘されてゐる。例へば、この日記の中にあらはれてくる史實についての一層たしかな考證であるとか、種々な年中行事、風俗、信仰等の精密な比較研究であるとか、當時の兩性間の關係、結婚貞操等の眞相の究明であるとか、京師を中心とする地理的關係の考察であるとかのやうな、內容についてのたしかな研究が、そのままに殘されてゐる。又、異

本の比較、本文の校合、語句の解釋、索引、又は年表の完成、さう云ふ本文批評が、まだほとんど手をつけてないと云つてもよい。又、この日記にあらはれた文字、語法、文法等についての言語學的な研究も全く試みられてゐない。又、この日記が、いかに他の女流文藝に影響したか、かゝる精神が、いかに展開したかといふやうな特殊な問題も、今のところ、そのままに殘されてゐる。これ等の諸問題は、今後の新しい學者の努力によつて、一部分づつでも明かにされなければならない。この小稿は、かゝる多くの問題の中の一つさへ完全に闡明し得たものではない。たゞ蜻蛉日記の性質を一般に紹介し、新しい研究の方面を提案し得たら、それで滿足である。

和泉式部日記の傳本と註釋書

和泉式部日記の名は、本朝書籍目錄に、和泉式部日記一卷と見え、又、群書一覽にも同樣のことが見えてゐる。明月記天福元年正月二十日の條に、十二人の歌を繪に書いたことを記してゐるが、それによると、清少納言（按ふに清少納言枕草子のことなるべし）や、紫式部などと一緒に、この日記も繪にかかれたらしい。九月（和泉式部帥宮町門）とあるのであるが、これは、この日記の中の一事實を主題としたものであらう。

和泉式部日記は、刊本として傳へられたものは、たいてい和泉式部物語となつてゐる。これ等の名稱は後人の附する所であらう。しかし、この書が果して和泉式部の著はす所であるか否かは、なほ十分考へられなければならない。三人稱でかかれ、物語といはれるのによつても、この日記が、その日、その日の日錄ではないことが明かである。しかし、他の女流日記の多くが、やはり、あとから思ひ出

して書いたものらしいのであるから、日錄でないことは、別にこの日記だけの特質ではない。しかし、三人稱で書かれたことが、作者についての疑問の種となるのである。

この書が、和泉式部の作であらうと推定される理由は、先づ日記の中に引かれた歌が、式部自身の歌であることが明瞭であり、次に、第三人稱で書いてはあるが、自叙傳的のもので、和歌をもとにして、後人が小說的構想のもとに書いたものとは思はれないからである。文章も、古雅で、決して平安朝以後のものではないと思はれる。反證のあがらないかぎり、和泉式部の作であらうと推定してさしつかへなからうと思ふ。

この書は、長保五年四月十日あまり、帥宮敦道親王が、和泉式部の家を訪うて、和歌の贈答のあるところから筆を起し、寛弘元年一月のころまで、二ケ年に亘ることが書かれてある。この本は、戀愛の一事件を書きしるしたもので、はじめからさう大きなものではなかつたであらう。しかし、卷末には、脫文があるらしく思はれる。今の本は、原本と同じものではなからう。

「和泉式部は、まれに見る大きな家集正續をのこすほど、當時有名な情熱歌人である。ことに、敦道親王との戀愛事件は、彼女が最も、魂をうちこんだものであるから、かう云ふ日記が生れるのは當然である。他にも、式部のかいた日記とか、物語とか、隨筆とかがあつたであらうが、今は傳はらない。」

この本の傳本はあまり多くはない。先づ扶桑拾葉集にをさめられた本があり、次に群書類從にをさめられた本がある。類從本は、扶桑拾葉集をもつて校合した由を卷末に記してゐる。刊本或は寫本で、公開又は公開に近い圖書館に藏せられてゐる本は、次のやうである。

一、和泉式部物語　享保二十一年刊　（帝國圖書館）

この本は、奥に

寫本云此一冊借二右中辨兼秀本一從二去月十四日一染筆、今日終功畢
享祿二年五月朔日　右少將藤原言繼草名

とある。次に、

一、和泉式部物語三冊　寛文年中刊　（南葵文庫）

この本の奥書は、全然前のと同じい。上、中、下の三冊に分れて、繪がはいつてゐるのはめづらしい。表紙に、稱意館藏本とあり、又、各冊のはじめに、陽春廬記の朱印がある。

一、和泉式部物語一冊　元文元年刊　（内閣文庫）

この本も別に變つた本ではない。

一、和泉式部物語一冊　寫本　（圖書寮）

書入れもなく、奥書もないが、多少字句の異同がある。

一、和泉式部物語三冊　寛文年中刊　（大阪市圖書館）

この本は、南葵文庫の本と全く同じ本である。

一、和泉式部物語一冊　寫本　（大阪市圖書館）

この本は、初代豊田文三郎といふ人の遺したものであつて、卷末に、敦道親王と、和泉式部との略譜がのせてある。そしてその次に、

此本寫謬おほし。以他本令校合畢ぬ。今傍にイとせるは、扶桑拾葉集の本なり。又イとあるは、拾葉本の異本也。板本とは、享保刻の町板本也。板イとしるせるは、則其板行の異本なりとしるべし。右板行の本といふも、寫誤或は脫落あり。拾葉本にて補ふ。但しいまだ全しとせず、猶いかにぞやある所あり。考ふべし。今本のままに寫し、ひがめるは、もとのままあらたむ。しるしなきをそれとしれ。かく云ふは、天だもつとしの十五年睦月一日なり　儒天館藏

とある。系統の正しい本ではないけれど、丁寧に諸本をもつて校合したもので、參考になる貴重な本である。

一、和泉式部物語一卷　寫本　（京都帝國大學）

この本は、奥に

于時應永二十一年孟春書之　權大納言從二位爲平判

とあつて、最も注意すべき古寫本である。京都帝國大學には、この外に刊本一卷がある。

一、和泉式部物語一卷　寫本　（彰考館）

以上の外に、諸家の文庫に秘藏せられるものも、二三見たが、別に善本は見あたらなかつた。近頃出て來る叢書本は、たいてい類從本によつたものである。

和泉式部日記の研究は、まだ完成されたものを聞かない。和泉式部日記標目寫本一卷が、帝國圖書館に藏せられてゐるが、これは、日記にあらはれた事項を、類別して列擧したにすぎない。大正五年に、與謝野晶子女史の新譯和泉式部日記が出て、この日記をひろく一般に紹介したのであるが、最近、京都帝大の國文學科に關係ある人々の努力で、全譯王朝文學叢書が刊行されて、その中にもたしかをさめられるとか聞いてゐるが、まだ出版にならない。この日記を英譯したものには、

Diaries of Court Ladies of Old Japan,
Translated by Annie Shepley Omori and Kochi Doi.

がある。

この書は、一九二〇年、米國で出版されたもので、Am Lowell といふ人の書いた Introduction がそへてあつて、內容は、和泉式部日記の外に、紫式部日記、更級日記も合せてある。多少意味の誤られた所がないでもないが、しかし、國文學の專攻者でなくて、これほど消化し得た點については敬意を拂ふべきである。宮廷女流日記は、この著によつて、本國よりも、かへつて異國でもてはやされたかの觀がある。

次に未刊のものではあるが、自分の「和泉式部日記考」は、如上の諸本によつて本文を校定し、それに少しく註解を試み、年表と索引とを附したものである。

和泉式部を考へる上に、ぜひ參考しなければならない參考書は、大鏡、榮華物語はもとより、帝王編年記、愚管抄、百錬抄、一代要記、皇年代略記、歴代皇記、扶桑略記、日本紀略等の史書や、權記、小右記等の家記をはじめとして、和泉式部集、その他の勅撰集等である。

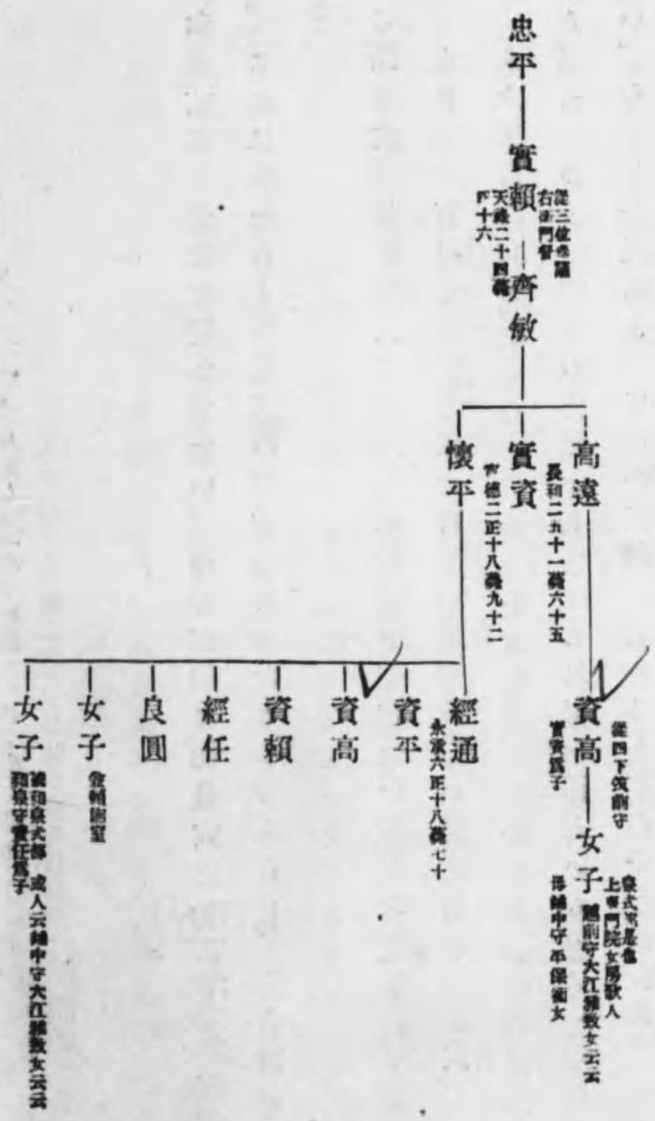
和泉式部の事蹟と傳說

一

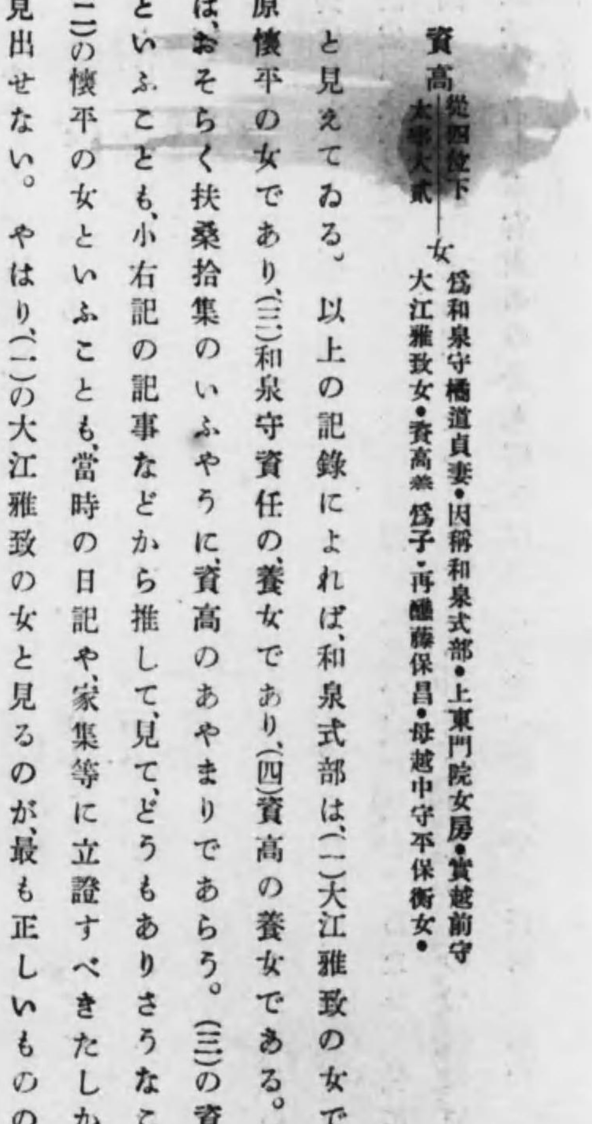
和泉式部の傳記は明かでない。作者部類に、和泉式部（上東門院女房越前守大江雅致女）とある。これはおそらく、拾遺集の詞書によつたものであらう。中古歌仙三十六人傳に、

和泉式部越前守大江雅致女、或說權中納言懷平卿女云々、母越中守平保衡女、太皇太后宮昌子御乳母、號介內侍、和泉守橘道貞爲妻、仍號和泉式部、童名御許丸、上東門院女房。

と見えてゐる。式部の傳記としては、これ以上詳しいものは一寸見あたらない。今尊卑分脈によつてその系譜を考へると、次のやうになる。



と見え、扶桑拾葉集の系圖には



と見えてゐる。以上の記錄によれば、和泉式部は、(一)大江雅致の女であり、(二)藤原懷平の女であり、(三)和泉守資任の、養女であり、(四)資高の養女である。(三)の資任は、おそらく扶桑拾集のいふやうに、資高のあやまりであらう。(三)の資任の養女といふことも、小右記の記事などから推して、見て、どうもありさうなことでない。(二)の懷平の女といふことも、當時の日記や、家集等に立證すべきたしかなものが見出せない。やはり、(一)の大江雅致の女と見るのが、最も正しいもののやうに思はれる。それは、拾遺集に見えてゐる有名な「はるかに照らせ山の端の月」といふ歌が、「雅致女式部」として出されてあつて、その歌が、和泉式部集にも出てゐるのであるし、又、赤染衛門集に、

たかちか(擧周)まさむねがむすめにものいひそめて、ほどもなうみたけにまうでて、かへりては、京にして、しばしもなくて、くだりたりしかば、いみじくてやうせし

心にもあらでぞなげくよしの山君なみたけのほどなかりしを

かへしあれの和泉式部

とまるべき心ならねば花すすきただ秋ゆくとまたせてぞみし

と見えてゐるし、他にも見えてゐて、このあねの和泉式部といふのは、所謂和泉式部のことでなければならないと思はれるからである。

おそらく、和泉式部は、大江雅致の女であつたであらう。しかし、他の何人かに養はれたことも、全然無いとは云へぬであらう。その點は、只今までの史料では論定が不可能である。雅致の系圖は尊卑分脈に見えてゐない。他に、雅致の系圖をのせる大江氏系圖がないことはないが、あてになるものではない。しかし雅致の名は小右記の中にしばしば見え、又、彼が越前守に任ぜられたことは、御堂關白記寛弘七年三月三十日の條に明記してあるから疑はれない。

母は、歌仙傳、尊卑分脈扶桑拾葉集系圖等に見えてゐるやうに、越中守平保衡の女である。歌仙傳によると、昌子內親王の乳母であつて、後に典侍になつたらしいがたしかなことは分らない。

次に、式部は、どこで生れたかと考へて見るに、おそらく京都であらう。その母が、宮仕をしてゐたらしいことによつても知れる。出生地については、所謂美人出生傳說が、各地に傳へられてゐて、因幡國守大江貞基が、子無きを悲しみ、法美郡寶生山圓生寺の本尊千手觀音に祈つて、和泉式部を得たとなすもの因幡志、因幡國氣高郡湖山村霞の里が誕生地であるとなすもの口碑その他、肥前國杵島郡和泉村、扁泉寺緣起　丹後國天の橋立　漫遊人國記　駿河國駿東郡竹下村　駿河志料　等をはじめとして、信濃國諏訪郡となすもの、陸中國和賀郡となすもの、和泉國堺市となすもの、一々枚擧にいとまのない位である。これ等は、もとより傳說にして、信

ずべきものではないが、何故に、和泉式部傳說が、かく廣く分布するに至つたかは、說話學上に於ても、文學研究上に於ても、重要な考究題目であらう。

次に、和泉式部は、何時生れたのであるか、これについても確證はない。因幡志の傳說は取るに足りないが、謠曲拾葉抄誓願寺の條に、

越前守雅致が女和泉式部齡三十五の時、小式部を先たてかなしみのあまり發心して當寺に籠居し、念佛三昧にして往生をとげぬ。

とある。小式部がなくなつたのは、榮華物語によれば、萬壽二年十一月であつたと思はれるから、もしそれが正しいのであるなら、和泉式部は正曆二年の誕生で、問題にならない。和泉式部の誕生の年月を推定することは、今まで發見された史料では全く不可能である。種々なる傍證を一々明かにして行つて、想定するより外仕方がないであらう。即ち、(一)は式部が道貞に嫁したときはいつであるか。(二)小式部內侍を生んだのは何時であるか。(三)上東門院に仕へたのは何時であるか。(四)爲尊敦道兩親王に寵せられたのは何時であるか。(五)昌子內親王の乳母たりし母保衡女が式部を生んだのは何時頃であるか。(六)藤原保昌と共に丹後に下つたのは何時であるか。(七)式部集に見えた花山院歌合はいつであるか。(八)小式部內侍が「大江山いくの野の道の」の歌をよんだのはいつであるか。さう云ふことを一々討究する必要がある。けれども、ここでは、あまりに煩はしいから、さう云ふ考證を一々あげることは避けようと思ふ。大體の想像をもつて云へば、おそらく、安和前後の誕生であらう。さう見て、大いしたまちがひはなからうと思ふ。

和泉式部は、長じて橘道貞の妻となつたのであるが、そのことは、扶桑拾葉集系圖にも、橘氏系圖にも見え、尊卑分脈にも、

諸兄——奈良麿——島田麿——長谷雄——海雄——茂枝——
　　佐臣——仲任——道貞（正四下 陸奥守）——女子（上西門院女房小式部內侍母 和泉式部大二條關白妾 靜圓僧正母 歌人 後拾遺以下作者）

とある。道貞の名は小右記にも見えてゐて、彼が陸奥守であつたことは、詞花集六別に「道貞にわすられて、後、みちのくにのかみにてくだりけるにつかはしける」とあり、その他和泉式部集や赤染衛門集にしばしば見えてゐるからまちがひはない。又、和泉守であつたことは、多くの諸書の等しく從ふところであつて、式部が、和泉とよばれた理由でもある。式部が道貞に嫁したのは、花山院歌合に列してから、まもないころのことではないかと思ふ

式部は、道貞と共に和泉に下つたことがあつたかと云ふに、和泉名所圖會に

當國の內和泉式部の舊蹟といふもの、凡て三十餘所あり。日根郡谷川小島の邊(今の泉南郡多奈川村大字谷川小島の地)に至りては、式揚枝の清水、鏡石、醬水壺さて、さまざまの名あり。式部は上東門院の侍女、和泉守道貞の妻なり、故に和泉式部といふ。其後道貞に捨てられて、藤原保昌に嫁す。貴布禰の社にて、螢の和歌、御堂關白通ひたまひし時の歌、代々の勅撰に多し。然れども、和泉國に趣きし體、曾つて見えず。後人、和泉の名によりて作るものか、甚だ不審し。

とあつて、和泉の國に下つたことを疑つてゐるが、泉州志には、

和泉式部舊跡、在上松村、俗曰式部塚、余按式部者、上東門院侍女、和泉守橘道貞之妻、故號和泉式部、後被捨于道貞、嫁藤原保昌、住丹後事見金葉集、墳墓在平安城誓願寺、何在當國乎、式部之舊蹤匪啻此地闔國往々在矣、或云出生地、或云歿卒地、想夫道貞任國間、式部亦可寓居也、花晨月夕豈不遊行乎、今處々舊蹟者疑皆遊行之地乎云々

と云つてゐる。按ふに、式部は和泉の國に下つたことがあるであらう。それは、後拾遺九旅に、

和泉へ下り侍りけるに、よる都鳥のほのかになきければ、よみ侍りける。

ことはば、ありのまにまに都鳥都のことを我にきかせよ

とあるによつて知られる。式部は能因流の歌人にあらず。

次に、小式部の生れたのは、いつの頃であるかと云ふに、小式部の歿年は、榮華物

語衣珠の卷に

かゝる程に、この頃聞けば、大宮にさぶらひつる、小式部の内侍といふ人、内大臣の御子などもたるが、この年ごろ、しげのゐの頭中將の子うみてうせにけり、

とあつて、萬壽二年十一月の事である。俗説に、小式部は長和三年十八歳をもつて死せりといふものがあるけれど、さうではない。小式部が、已に教通の子を生み、又、公成の子を生んだのをもつて考へると、少くとも、その歿年は三十歳を下るまいと思ふ。やはり、小式部は、正暦元年までに生れてゐたものと見なければならない。

式部は小式部が生れてから、夫道貞と別れたのであるが、その理由を死別とする説は、百人一首の諸抄をはじめ多くの書の從ふところである。しかし、それは、全然誤つた説であつて取るに足りない。赤染衛門集に

みちさだみちの國になりぬとききて、いづみしきぶにやる

ゆく人もとまるもいかが思ふらん別れて後のまたの別れは

かへし

別れても同じ都にありしかば、いとこのたびの心地やはせし

とあり、又、

みちさだ下るとて、道なれば尾張にきて、物語などして、かく遙かにまかることの心細きことなどいひてかへりぬるに、さるべきものなどやるとて

ここなだに行く方のとは思はれんこれより道のおく遠くとも

かへし

いざさらはなるみの浦に家居せんいと遙かなる末の松とも

とあり、和泉式部集に

さりたるをとこの遠きくにへ行くをいかかきくといふ人に

と詞書して、別れても同じ都に云々の歌がのせられてゐる。この歌千載集七にも見えたり　又、

はやう別れし人のもとに、

それながらあるかなきかと昔見し人に問ひてや我はしらまし

はかなうて絶えにしなとこのもとよりあはれなることいひたる返事

頼むべき方もなけれど同じ世にあるはあるぞと思ひてぞふる

みちのくのかみにてたつなをきて

もろともにたたましものなみちのくの衣の關をよそにきくかな（この歌詞花集六にも見えたり）

和泉式部續集に

陸奥國へいひやる

たかかりし浪によそへてその國にありてふ山をいかにみるらん。

和泉式部が宮仕をしたのは、いつの頃であらうか。玉葉集十四、雜一に

和泉式部はじめて參り侍りける頃祭の日あふひに書かせ給ひてたまはせける　上東門院

ゆふかけて思はざりせは葵草しめの外にぞ人をきかまし

御返しゆふにかきて御帳の帷子に結びつけ侍りける　和泉式部

しめの内になれざりしよりゆふ禰心は君にかけてしものを

とあり、藤原彰子の中宮となつたのは、日本紀略に

長保二年二月廿五日癸酉、以女御從三位藤原朝臣彰子、爲皇后（號之中宮）即任宮司、

以元中宮職、爲皇后職、

とあり、長保四年のころ、已に和泉式部とよばれたことが、榮華物語に見えてゐるから、式部の宮仕は、長保二、三年の頃で、道貞と別れてから、いくばくもない頃であつたであらう。式部が、爲尊親王に見そめられ、又、帥宮と同じ車にのつたことはこの宮仕のほどの事であらう。

式部が、中宮に仕へて恩遇を蒙つたことは、中宮が式部に賜はつた歌で知られる。これは、式部の才能を愛し給ひし故でもあり、又、彼女の卒直純眞な性情をめ

で給ひしにもよるであらう。式部に賜つた中宮の御歌は玉葉、新古今集等に見え、式部が、ことあるごとに、秀歌を中宮に奉つたことは、榮華物語をはじめ多くの勅撰集に見える所である。

次に、式部が、書寫山性空上人に贈つたといふ有名な歌がある。拾遺集二〇哀傷に、

性空上人のもとによみてつかはしける

くらきより暗き道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月

この歌について、一箇の傳說がある。即ち播陽古跡便覽に、上東門院播磨書寫山に行啓があつて、和泉式部もまた供奉したのであるが、還御の後、式部は一人とどまつて、かつて、捨子にした小式部の行方を求め、若狹野の長者五郎左衞門の家で、尋ぬる小式部をさがしあてたといふことをのべてゐる。これは、性空上人におくつた上の歌と、お伽草紙の記事とから附會した傳說と思はれる。

二

和泉式部と道貞との離婚の原因は、やはり式部の多情の性格によるものであらう。その情人の中で最も式部の心をとらへたのは、爲尊親王であつて、その系圖を榮華物語帝王源氏系圖から抄出すると、次のやうになる。

- 冷泉院（六十三代）諱憲平　寛弘八年十月廿四日、日蔭の蔓の卷にかくれさせ玉へり
  - 花山院（六十五代）諱師貞　花山卷御即位同卷御出家
  - 三條院（六十七代）諱居貞　母兼家公女超子
  - 爲尊親王　彈正宮母同　長保四年六月薨
  - 敦道親王
  - 五宮實花山院御子　愚云五宮六宮大鏡短觀抄系圖に見えず
  - 六宮右同
  - 女子一宮宗子（母同花山院）
  - 尊子　圓融女御、御早世　母同齊宮、大宮と申し

爲尊親王と情事のあつたことは、榮華物語鳥邊野の卷に

この程は、新中納言和泉式部などにおぼしつきて、あさましきまでおぼしましつる御心ばへを云云

とあるによつて知られる。爲尊親王、敦道親王兩宮の人品が輕くして、華美にすぎたる事は、大鏡に、

この宮たちは、御心のすこしかろくおはしますこそ云々

とあるによつて知られる。又爲尊親王が、操行をさまらなかつたことは、榮華物語鳥邊野の卷に

彈正宮うちはへ御夜ありきのおそろしさを、世の人安からず、あいなきことなりとさかしらにきこえさせ給へつる云々

とあり、又攝政伊尹の女に通じ、つひに妃となし給へることが、大鏡や榮花物語等に見えてゐる。かくて、爲尊親王は、長保四年六月十三日薨去されたのである。

が、このことは權記をはじめ一代要記日本紀略等に見えてゐる。親王の年二十六（榮華物語はせり）であつたのであるが、式部は、その時已に三十五をすぎてゐたであらう。その時、式部の追悼歌がある。

千載集　九　哀傷

彈正尹爲尊のみこにおくれ侍りてよめる

なしきかなかたみにきたる藤衣ただこの頃に朽ちはてぬべし

續拾遺集十八　雜下

彈正尹爲尊親王かくれて後つきせず思ひ歎きてよみ侍りける

かひなくてさすがに絶えぬ命かな心を玉のをにしよられば

新古今集　八　哀傷

彈正尹爲尊親王に後れて歎き侍りけるころ

寢覺する身を吹きさほす風の音を昔は袖のよそにきゝけむ

和泉式部續集

宮の四十九日誦經の御ぞものうたする所に、これを見るがかなしき事などいひたるに

うちかへし思へばかなしけふりにもたちおくれたる天の羽衣

情人爲尊親王を喪へる和泉式部は、しばらく獨居の生活をつづけたやうであるが、しかし、その頃、已に情事絶えざりしことは、日記の本文に、たのもしき人とて、源少將、兵部卿などの通ふ噂のあつたことが見えてゐるによつても知られる。和泉式部集について見るのに、式部と和歌の贈答のある人が少くない。雅道、賴信等は云ふに及ばず、口論して別れたる男、心にもあらでよそよそになりし人、一日もおこたらず音せんと契りし人、かたみに忘れじなどいふ男、たのめて見えぬ人、もろともにちぎる人、かならずこよひといひたる男、ほかに通ふ男、人のもとに行くなりと聞く男、うらみて久しう音せぬ男、かたらふ人ありときく所にとまる男、久しうとはぬ男、久しうありて問ひたる男、つらけれど忘れじといふ男、わりなくうらむる人、かたらはんといふ人、夜ふけて來りける男、まゐりたりけれど、人のおはしますとききしかばかへりし人、いみじうものおもはむと契りたるに、ことと人かたらひたりといひつけて音せぬ人、けさうする人のきて物など云ひたるほどにきたる人等一々列擧の煩に堪へない位である。もとよりこれ等の中には、爲尊敦道兩親王のこともあるであらうし、また、同一人のことを樣々に云ひあらはしてゐるやうな場合もあるであらう。しかし、これほどの多くの戀の歌は、他の閨秀作家の家集には珍らしいところである。

ここに一言すべきことがある。それは道命阿闍梨と式部との情事についてである。道命は、尊卑分脈に、東宮傅道綱四男、能讀歌人、天王寺別當、母中宮少進、近廣女とある人である。宇治拾遺物語卷一に

今は昔道命阿闍梨とて傅殿の子に色にふけたる僧ありけり。和泉式部に通ひけり經をめでたくよみけり、それが和泉式部がりゆきて臥したりけるに、目覺めて經を心

をすましてよみけるほどに、八卷よみはてゝ騎まどろまんとするほどに、人のけはひのしければ「あれは誰ぞ」と問ひければおのれは五條の西洞院の邊に侯ふ翁に侯ふ」と答へければ「こは何事ぞ」と、道命いひければ「この御經を今宵うけたまはりぬること、の生々世々忘れ難く侯ふ」といひければ云々

と見え、古今著聞集卷八、好色第十一に

道命阿闍梨と和泉式部と一つ車にてものへ行きけるに、道命うしろむきてゐたりけるを、和泉式部などかくはゐたるぞといひければ、

おそろしやむきともむかじいがくりのゑみもあひなばおちもこそすれ

和泉式部が、かく道命阿闍梨と契つたことは、古事談その他にも見えてゐるがおそらく傳說にすぎまいとは思ふが、多少さう云ふ事實があつたと思はれぬでもない。もしさう云ふ事實があつたとすれば式部が丹後から歸洛せる程のことであらう。

次に、式部の第二の情人は、帥の宮敦道親王である。その情事を記錄したものが、和泉式部日記である。長保五年四月十餘日のほど、親王御しのびあり、爾後ひきつづきわりなき御交りありし由日記に見えてゐる。大鏡兼家傳に

この東宮の御弟の宮たちは、少しかろがろにぞおはしましし。帥宮の祭のかへさ、和泉式部の君とあひのらせたまひて、御覽ぜしさまも、いと興ありきやな、御車のくちのすだれを、中よりきらせ給ひて、わが御方なばたかうあげさせたまひ、式部の方をばおろして、きぬながういださせて、紅の袴に、あかき色紙の物忌ひろきつけて、土さひとしうさげられたりしかば、いかにぞ、物見よりはそれをこそ、人見るめりしか。

とある。又榮華物語はつ花の卷に

小一條の中の君ときこゆるは(中略)春宮の御弟の帥宮に聞えつけ給へりしかば、南院にむかへ給へりしかど、年月にそへて御志淺うなりもていきて、和泉守道貞が妻を思しさわぎて、この君なば、殊の外に思したりしかば、居わづらひて、小一條の祖母北の方

の御もとにかへり給ひにしぞかし(中略)和泉なれば、故彈正の宮もいみじきものに思し
たりしかば、かく帥宮もうけばりおぼすなりけり。

とある。その他敦道親王と情事のあつたことを記した文献を尋ねると、

一、和泉式部集

十月ばかり帥の宮よりいかにつれづれにとのたまへれば
花見つつ暮しし時は春の日もいとかくながきこころやはせし
そちの宮うせ給ひてのころ
かるもかき伏猪の床のいを安みさこそれざらめかからずもがな
そちの宮にて題十給はせたる
(こゝに十首の歌あれど略す)
石山にこもりたるを久しうおとづれもし給はでそちの宮
せきこえてけふぞとふやと人はしる思ひたえせぬ心づかひを
かへし
あふみぢは忘れぬめりと見しものを關うちこえてとふ人やたれ

二、千載集　十四　戀四

太宰帥敦道のみこ中たえ侍りける比、秋つ方に思ひ出でゝものして侍りけるに、よみ
侍りける
まつとてもかばかりこそはあらましか思ひもかけぬ秋の夕暮

同　十六　雜

彈正尹爲尊のみこかくれ侍りて、後太宰帥敦道のみこ、花たちばなをつかはしていか
が見るといひて侍りければつかはしける
かをる香によそふるよりは時鳥きかばや同じ聲やしたると

三、新勅撰集　十一　戀

和泉式部に遣しける

うちいでも有にしものなかく に苦しきまでも歎く今日かな

かへし　和泉式部

けふまでの心にかへて思ひやれ詠めつゝのみすぐす月日を

四、新古今集　十六　雜

敎道のみこの許に、前大納言公任の白河の家にまかりて、又の日、みこの遣しける使につけて申し侍りける

折る人の其なるからにあぢきなく見し我宿の花の香ぞする

帥宮との情事ありし頃、親族にあたる赤染衛門は、親ら書をよせて式部をいさむる所があつたが、そのことは和泉式部集に

みちさだ去りて後帥の宮に參りぬとききて　赤染衛門

うつろはで暫ししのだの森を見よかへりもぞするくずのうら風

返し

秋風はすごく吹くともくずの葉のうらみ顏には見えじとぞ思ふ

とある。この歌は、赤染衛門集にも見えてゐる。

このはかなき交りも長くはつづかず、帥の宮のみまかり給へることは、榮華物語はつ花の巻に

哀れなる世の中は、ゆるか中の夢に劣らぬさまなり。あさましきことは、帥宮の思ひもかけざりつる程に、はかなう煩はせ給ひて、うせ給ひにしこそ、猶々あはれにいみじけれ。

とある。權記に

寛弘四年十月二日乙未、前太宰帥三品敎道親王薨、年廿七、冷泉院太上天皇第四親王也。母女御藤原超子、前太政大臣一女也。

とある。榮華物語に、七年のこととなすはあやまりであらう。道長公記には四年のこととしてゐる。花山の巻、天元元年の條に、御誕生ありしことが見えて

ゐるから、四年の蕊去としても、御享年に合はないけれど、按ふに四年前、二年後で、あつたであらう。その時の式部の歌は、後拾遺十哀傷に、

敦道親王に後れてよみ侍りける

今はただそよ其の事と思ひ出て忘るばかりのうき事もがな

同じ比尼にならむと思ひてよみ侍りける

すてはてむと思ふさへこそ悲しけれ君に馴れにし我身と思へば

その頃、なほあだし男の風評の絶えなかつたことは、和泉式部集に

そちの宮うせ給うてのころ、ふのとのに

さるめみてよにあらしとや思らむ哀なしれる人のとけわは

ふのとのより

袖ぬれていづみといふ名はたえにきと聞きしを數多人のくむなる

三

和泉式部が藤原保昌に再嫁したことは、諸書に見えてゐる。保昌の系圖を、尊卑分脈によつて抄出すれば、次のやうになる。

不比等——武智麿——巨勢麿——黒麿——春繼——良尚——齊光（從五下　右兵衛尉）

齊光——保昌（界殿　肥前守、正四位下　大宰帥、丹後守　備後守、右馬頭）

保昌——女子（母元明親王女　長元九　卒七十九　贈人所藤色）

保昌——快覺（俗名藤原泰通　法名覺　法勝寺別當）

齊光——維光（右京亮　右兵衛尉）

維光——保輔（右京亮　右兵衛尉　正五下　強盜張本本朝世一武略優長　官軍十ヵ月後梟首獄自殺）

保輔——女子（河内守頼信傳　西蓮伊室）

齊光——菅根——元方——致忠

式部が保昌に嫁した年齢と、その事情とを、小說的に修飾したものはお伽草紙和泉式部である。

中ごろ花の都にて、一條の院の御時、和泉式部と申して、やさしき遊女あり。だいりに橘保昌とて男あり。やすまさは十九、和泉式部は十三と申すより、ふしぎのちぎりをこめ、なさけふかくして、十四と申す春の頃、若一人まうけ給ひ、あひの枕のむつごとに、はづかしとやおもひけん、五條の橋に捨てにけり。うぶきぬあやの小袖のつまに、一首の歌を書き、さやなきまもりがたなをそへてすてけるを、まちにんひろひ養育して、比叡の山へのぼせけり。

さる程に、學問心ざしふかく、ならびなく、みな心をかけぬ法師もなく、其名總山にかくれなく、なさけのいろもわりなきさまなり。總山のもてあそびのみならず、佛道のみちをたのもしく、其名天下に廣まり、さうめい阿闍梨とて、世にかくれなくして、さうめい十八のとしだいりのはつかうをつとめ給ひし時、風ふきてつぼねのみすを、二三度ふきあげて、年の程二十ばかりなる女房の、眉はこぼれてよしありて、論議聽聞して、おもひ入りたる風情にておはしけるを、さうめいたゞ一めみしよりも、あさからぬ身にあこがれて、わがやどに歸り、山にあがり給ひても、みし人のおもかげ身にそひて、わすれぬは前世の宿業なり云々。

これは、史實としては一顧の價値もないものであるけれど、傳說が文學に化して行く徑路を示したものとして注意すべきである。「式部が保昌に嫁したのは、帥宮薨後、卽ち寛弘四年後のことであつて、保昌五十歲前後の程であつたと思ふ。式部は保昌に伴つて、任國攝津に下り、その間、長谷村五雲寺に紀忠通を訪ねたことが、溫故隨筆に見えてゐる。その說が果して正しいか否かは、なほ十分考へなければならない。しかし、和泉が、攝津に下つたことはたしかである。式部續集に

攝津のくにいくたのもりと云所にて

なにはめにいく田の森のありければむべながらふと人も云ひけり（この歌夫木抄にも見ゆ）

式部は、その後、保昌に從つて、任國丹後に下つたのであるが、この事は、かの有名な大江山の歌の傳說によつて、あまねく世に知られてゐる。金葉集九雜上に、

和泉式部保昌にぐして丹後國に侍りけるころ、都に歌合ありけるに、小式部內侍歌よみにとられて侍りけるを、中納言定賴つぼねのかたにまうできて、歌はいかゞせさせ給ふ、丹後へ人は遣しけん、使はまうでこずや、いかに心もとなくおぼすらむなどたはぶれて立ちけるをひきとゞめてよめる　小式部內侍

大江山いく野の道の遠ければまだふみもみずあまの橋立

とある。

又、袋草紙第一に

有歌合之比、長元歟、小式部內侍入歌人之時、母和泉式部爲保昌妻、在丹後國、定賴卿小式部內侍局前立寄戲云、イカニ丹波へ人ハ被遣候哉、未皈參歟ト云テ起時、式部取直衣袖云、

大江山いくのの道の遠ければまだふみもみず天のはし立

定賴ヒキヤリ逃ト云々

とあり、その他、十訓抄第三、古今著聞集卷五、百人一首の諸抄等にも散見し、安嘉門院四條のよるのつるにも見えてゐる。又、和泉式部集に

丹後にくだるに、宮よりきぬあふぎ給はせたるに、あまのはしだてかかせ給ひて

秋霧のへだつる天の橋立をいかなるひまに人わたるらむ

御返し

思ひたつ空にぞなけれ道もなくきりわたるなる天の橋立

その他、諸集に散見するによつて、式部の丹後に下つたことは疑はれない。

浪華百事談九に、攝津國東城郡生野村の舍利寺に、和泉式部の腰掛松といふものが存してゐると見えてゐるし、姫路名跡誌には、播磨國飾磨郡飾磨町に、和泉式

部のうゑた折居松があると云つてゐる。これ等は式部下向の事實を附會した傳說であらう。

「さて、式部が丹後に下つたのは、何時頃のことであらうかと云ふに、上にあげた袋草紙の記事に、長元數と云つてゐる。しかし、小式部のみまかりしことは、榮華物語衣珠の卷に、萬壽二年十一月のことのやうに書いてゐる。按ふに、この事は、寛弘五年以後、寛仁元年以前のことであらう。一說に、大江山の歌は、寛弘三年小式部十三歲の時となす說もあるが、十三歲とは取るに足りない說である。榮華物語、紫式部日記等の中宮御產の條に、多くの女官の名は見えてゐるけれど、式部の名の見えないのは、多分丹後に下つてゐた時であるからであらうと思はれる。

丹後にゐた時、式部の生活はどうであつたかと云ふに、已に情人のあつたことが、詞花集八戀下に見えてゐる。

藤原保昌の朝臣にぐして丹後の國へまかりけるに忍びて物云ひけるをとこの許へ云ひつかはしける。

われのみや思ひおこせむあぢきなく人は行方もしらぬものゆゑ

かくて、式部は、夫と共に京師に歸つてきたのである。夫と共に歸つてきたのか、又はただ一人歸洛したのか、なほ考へなければならない。その故は、玉葉集十七雜四に

枇杷皇太后宮の御ために、佛作られけるに、かざり玉を藤原保昌朝臣丹後守にて侍りけるに、めされけるを奉るとて

數ならぬ泪の露をかけてだに玉のかざりをそへむとぞ思ふ

とあり、榮華物語、玉の飾の卷に

かくて七々日の御ありさま、せさせ給ふことゞも、えかきつづけず、この度の御佛造らせ給ふ御かざりの御れうには、大和守保昌の朝臣のがり、たまをめしにつかはしたれば、京の家に奉るべきよしいひあげたれば、まゐらすとて、いづみそへたり。

數ならぬなみだの露をそへてだに玉のかざりをまさんとぞおもふ

とある。これは、萬壽四年十月のことである。按ふに、丹後守となすは玉葉集の誤りであらうか。この時、保昌は、大和守として下つてゐたであらう。丹後から歸つた式部は、再び上東門院に仕へたかと云ふに、必ずしも昔のやうではなかつたであらう。しかし、なほねんごろに訪ひ奉れることは、和泉式部集に

丹後よりのぼりて練りたる糸宮にまゐらすとて

白糸のくるほどまではよそにてもこひに命をかけてへしなり

とあるによつて知れる。

式部の歸洛したのは、寛仁元年の頃ではなかつたのであらうか。その確證はないけれど、榮華物語疑の卷に

殿の御歌をききて、和泉式部が大宮にまゐらせたる

ぬぎかへんことぞ悲しき春の色を君がたちけるころもとおもへば

とある。これは寛仁三年三月つごもりのことである。（この歌和泉式部續集にも見えたり）それ故に、式部の歸洛は、それより前でなければならぬのである。

さて、保昌が、大和守となつてから後、式部は保昌と離別したのであるが、その理由を死別となすのはあたらない。詞花集九、雜上に

保昌に忘れられて侍りけるころ兼房の朝臣のさひて侍りければよめる

人知れず物思ふことは習ひにき花に別れぬ春しなければ

とあり、尊卑分脈に、保昌は長元九々卒七十九とあるから、推して知るべきである。

四

小式部の傳記は明かでない。上東院につかへて愛せられしことは、その死後中宮の追悼の御歌を見てもうなづかれよう。それ等の御歌は、金葉集十雜下、新

古今集八哀傷等に見えてゐる。

小式部は、身體虚弱であつたけれど、容色も美しく、才もあつたので、若い殿上人に愛せられたことは、諸種の記錄に見えてゐる。先づ大二條殿に愛せられたことは、袋草紙三に、

又大二條殿小式部内侍ヲオボスコロ、日來者御所勞ニテ、久アリテ平愈シテ、參上東門院給ニ、小式部内侍大盤所ニ仕候、令出給トテ、死トセシハナド不問ソト、被仰テ、スギタマフヲ、引留テ申ケル。

しぬ計歎きに社は歎きしか生てとふべき身にしあらねば。

不堪感情、カキイダキテツボネニオハシテ懷抱云々。

この話は、宇治拾遺物語卷五にも見えてゐる。又、古今著聞集卷八、好色第十に、

むかし大二條殿、小式部内侍のもとへ、月といふ文字を書きてつかはされたりければ、さるすきもの和泉式部が女なりければ、やすく心えて、月の下にたといふ文字ばかりを書きて參らせたりけるを、その心なるべし。月といふ文字は、夜さりまつべし、出でよと心えけり。又人のめす御いらへには、男はよと申し、女はたと申すなり。されば、小式部内侍その夜、上東門院にさぶらひけるが參りたりければ、いよ〳〵心まさりして、めでおぼしめしけり。これも一定參り侍りなむ。

とあり、又、今物語廿六に

小式部内侍大二條殿に思しめされける比、久しく仰事なかりける夕暮に、あながちに戀奉りて、はし近くながめ居たるに、御車の音などもなくて、ふと入らせ給ひたりければ、待えて夜もすがらかたらひ申ける。曉方に、いさゝかまどろみたる夢に、糸のつきたる針を、御直衣の袖にさすと見て夢さめぬ。偖歸らせ給ひけるあしたに、御名殘を思ひ出て、例のはしちかくながめ居たるに、前なる櫻の木に、糸のさがりたるなあやしと思ひて見ければ、夢に御直衣の袖にさしつる針なりけり。いとふしぎ也。あなかちに物を思ふ折には、木草なれども、かやうなる事の侍るにや、其夜御渡ある事、まことにはなかりけり。

とあるのであるが、この說話は、袋草紙四に

中關白爲少將時、語赤染之兄弟女、而忘給之後、彼女奉戀關白、日暮卷上南面簾テ、ナカメ居、然間直衣人寄香甚入來彼殿也。女有悅心會合、其後夜々來、但曉夕無車馬音、以長緒着針着直衣袖、朝此緒留南庭樹上、其後無來、是魅之所爲歟。

とあるのを、小式部のことに附會したのではないかと思ふ。おそらくさうであらう。

和泉式部集四に

入道殿の小式部の內侍子うみたるにの給はせたる

よめのこのこれずみいかゝ成りぬらんあな美しと思ほゆるかな

御返し

君にかくよめのことだにしらるればこの子れずみの罪輕きかな

とあり、小式部は、大二條殿に非常に愛されたのであるが、その頃堀川右大臣も、

小式部を愛してゐて、そこに一種の求愛の爭鬪が演ぜられたことは後拾遺集十六雜二に

小式部內侍のもとに二條前太政大臣はじめてまかりぬときゝてつかはしける　堀川右大臣

人しらでれたさもれたし紫のれずりの衣うはぎにもせむ　泉式部

かへし

ぬれぎぬとひとにはいはむ紫の根摺の衣うはぎなりとも

とあるによつて明かである。又、古事談第二に

堀川右府ハ、依四條中納言談經有元都云々、上東門院有好色女房、或說小式部內侍云々、堀川右府與四條中納言共愛此女、然間或時右府先入件女房局、已以懷抱、其後納言、于時頭辨云々。伺件局之處、已知會合之由、納言讀方便品歸了、女聞其聲、不堪感歎、背右府涕泣、丞相枕亦霑、丞相竊思、萬事不可劣定賴、不安之事也云云、因之忽發心、被覺

悟八軸云々

とあるから、よほど小式部が、若い殿上人に愛されてゐたことが分るのである。

尤もこの話は、宇治拾遺物語卷三に

今は昔、小式部内侍に定頼中納物いひわたりけり。それに又、時の關白通ひ給ひけり。局に入りて臥し給ひたりけるを知らさりけるにや、中納言寄りきてたたきけるを、局の人かくとやいひたりけむ、香をはきて行きけるが、すこし歩みのきて、經をはたとうち上てよみたりけり。二聲ばかりまでは、小式部内侍きと耳を立つるやうにしければ、この入り臥し給へる人、あやしと思しけるほどに、少し聲遠うなるやうにて、四聲五聲ばかり、行きもやらでよみたりけるとき、うといひて、うしろざまにこそふしかへりたりけれ。この入り臥し給へる人のさばかり堪へがたう耻かしかりしことこそなかりしかと後にのたまひけるとかや

とて、定頼中納言のことにしてゐる。こゝに關白といふのは、頼通のことではなくて、堀川右府のことではなからうか。頼宗を堀川右大臣といつたことは榮華物語根合の卷に見えてゐる。定頼は、大江山の歌の傳説に關係のある人であるから、或は、小式部とさう云ふ深い交りがあつたのかも知れない。

さて、大二條關白教通は、長德二年に生れ、寛弘八年十二月、中宮權太夫となり、同九年皇后宮權太夫となつたのであるが、その時、小式部内侍は後宮に仕へてゐたので、彼我互に交渉があつたのであらう。かくて、小式部は、教通の子を生むのであるが、その子とは、木幡僧正のことである。「榮華物語衣珠の卷に、小式部死去のことが見え、母式部の悲嘆のさまを記して、次のやうに云つてゐる。

かゝる程に、この頃聞けば、大宮にさぶらひつる、小式部の内侍といふ人、内大臣の御子などもたるが、この年ごろ、しげのゐの頭中將の子うみてうせにけり。人のいとやんごとなからぬ方こそあれ、しにざまの、御ことに似たる、大宮にも、いと哀にきこしめして、世のはかなさ、いとゞおぼししらるるにも、いかでとくと思しいそがせ給ふにも、御

調度どもなぞいそがせ給ふ。小式部の母和泉式部こどもを見て

留めおきて誰をあはれと思ふらんこはまさりけりこはまさるらむ

とよみけり。

とあり、又同じき卷に、

内大臣殿の若君(木幡僧正)なば宮の僧都といふ人の坊におはしければ、いづみむかし

こひしければ見たてまつらんわたし給へとあからさまにありければ、僧都たゞこの

中河におはして見奉り給へとありければ、いづみ

こひてなくなみだにかげは見えぬるを中河まではなにかわたらん

とぞいひやりける

この若君とは、靜圓卽ち、木幡の僧正のことである。今、尊卑分脈によつて、敎通の系圖を抄出すれば、次のやうになる。

- 通基
- 信長　母公任卿女

- 太政大臣　關白左大臣　敎通　承保二九廿五薨八十　號大二條殿
  - 信家　母公任卿女
    - 靜圓　號木幡僧正　權僧正　牛車　母小式部內侍橘道貞女
    - 靜覺　母同信家卿
    - 行覺
    - 證仁
    - 女子歡子　冷泉院后准三后　號小野皇后
    - 女子眞子　後朱雀院女御
    - 女子生子　尙侍從五上

次に、小式部內侍は、頭中將公成卿に愛せられ、その子賴仁を生むに至つた。蓋し敎通の妾として、靜圓を生んだのは、寬仁元年前後であつて、公成の子の賴仁を生んだのは、萬壽二年十一月のことである。身體虛弱であつた小式內侍は、產後いくばくもなく死去したことは、上に引いた榮華物語衣珠の記錄によつて明か

である。和泉式部集に、

内侍うせて後頭中將みづからさきこえむとのたまへるに

涙をぞ見せば見すべきあひ見てもことには出でむかたのなければ

頭中將

返し

たち出る涙の程をみるときはくさ葉はこひとしられやはする

今公成の系譜は尊卑分脈によりて抄出すれば次のやうである。

- 太政大臣 公季
  - 中納言 正二位 實成
    - 春宮權亮 中宮權大夫 權中納言 從二位 長久四 六廿四 四十五 公成
      - 實季 按察使春宮大夫 大納言 正二位 母淡路守藤原定佐女
      - 賴仁（アサリ） 母陸奥守道定女
      - 慶信 法印東大寺別當 母同實季
    - 後三條院女御白河院母能信卿母子
    - 女子茂子 母同 延久五五六贈太后

小式部は、若くしてしばしば重病にかかつたやうである。母式部との間に、母子の情のいかに濃やかであつたかは、各種の記錄に傳へられてゐる。古今著聞集卷五に

同式部が女小式部内侍、この世ならずわづらひけり。かぎりになりて、人の顏などもみしらぬ程になりて臥したりければ、和泉式部傍にそひゐて、額をおさへて、泣きけるに、目をわづかに見あげて、母が顏をつくづくと見て息のしたに

いかにせん行くべきかたもおもほえず親にさきだつ道をしらねば

と弱りはてたる聲にていひければ、天井の上に、あくびさしてやあらんと覺ゆる聲にてあらあはれといひてけり。さて身の暖さもさめてよろしくなりてけり。

これは傳說にすぎないのであるけれど、十訓抄第十にも見えてゐて、いくらか

事實を傳へるものと思ふ。なほ、小式部内侍がみまかつて、母式部が悲嘆にくれたさまは、次の種々の記錄によつて推定される。和泉式部集に、

内侍のうせたるころ雪のふりてきえぬれば

などて君むなしき空に消えにけんあは雪にだもふればふる世に

内大臣殿の若君わたし奉り給へて、見たてまつらんとありければ、ここにわたりて、見奉り給へとありければ

こひてなく涙にかげは見えたるをなかかまでも何か渡らむ

つれにもたりし手ばこを、おたぎに誦經にせさすとてかきつくる

こひわぶときくにだにきけ鐘の音にうち忘らるゝ時の間ぞなき

内侍もうせて後人のもとに

ひきかくる泪にいとどおほほれてあまのかりける物もいはれず

内侍なくなりてつぎのとし七月にれいやるふみになのかかれたるを

もろともにこけの下にはくちずしてうづもれぬ名を見るぞかなしき

内侍なくなりたる頃人に

歎くやとなきなりならば何によりおつる涙を人にいはまし

玉葉集　十七　雜四

小式部内侍なくなりて後よみ侍りける

あひにあひて物思ふ春はかひもなし花も霞も目にしたたれば

小式部内侍みまかりける頃人に遣しける

ふればうしへじとても又いかにせん天が下より外のなければ

金葉集　十　雜下

小式部内侍うせて後、上東門院より年ごろ賜はりけるきぬを、なき跡にも遣したりけるに、小式部内侍とかきつけられたるを見てよめる

もろともに苔の下には朽ちずして埋れぬ名をみるぞかなしき

後拾遺集　十　哀傷

小式部内侍なくなりて、うまごどもの侍りけるを見てよみ侍りける

とどめ置て誰を哀れと思ふらむ子は勝るらむ子は勝りけり

是元この歌了俊歌要抄、落書露顯等に引かれたる。この歌四五句榮華物語には子は勝りけり子は勝るらむとあり。

新古今集　八　哀傷

小式部内侍露置きたる萩おりたる唐きぬきて侍りけるを、身まかりて後、上東門院より、尋ねさせ給ひたるに奉るとて

おくと見し露もありけりはかなくて消えにし人を何にたとへむ

上東門院

御かへし

思ひきやはかなくおきし袖の上の露を形見にかけむものとは

小式部内侍みまかりて後つねにもちて侍りける手箱を、論經にせさすとて、よみ侍りける

戀ひわぶと聞きにだにきけ鐘の音にうち忘らるゝ時のまぞなき

以上の記錄を見るに、式部母子の愛情がいかに濃やかであつたかが知られる。今は亡き小式部がかたみの衣、手箱などを見ては、母式部は斷腸の思ひがあつたであらう。小式部が殘した若君達をしのびて「とゞめ置て誰をあはれと思ふらむ子は勝るらむ子は勝りけり」とうたつた心中を察すれば、そぞろ涙を禁じ得ないものがある。小式部が死するや「そのかみ戀しければ、形見なる若宮を見奉らまほしきに、こなたへわたりて見せ給へよ」と敎通がゆかりのものに哀願したけれども、其事がかなはなかつた時「こひてなく涙にかげは見えぬるを中河までは何かわたらむ」とうたつたのを見ては、誰しもほろりとさせられないではゐられまいと思ふ。

四

「和泉式部の晩年の消息は、杳として知るを得ない。」詞花集に保昌に忘れられ

て侍りける頃云々とあるのは、まさに萬壽四年以後の事であらう。その故は上文に引用した榮華物語玉飾の卷に、大和守保昌の朝臣の玉飾をさゝげ奉りしは、萬壽四年の事實で、その頃はなほ保昌の妻であつたからである。

一世の才女で、しかも傳記の詳でないものには、幾多の傳說が語られる。小野小町、和泉式部、小式部いづれも傳說の霧に包まれてゐる。紫式部の如き、已に各地に遊行の傳說口碑を止めて居る。

さて式部は、晩年に出家したか否かといふに、扶桑記勝二に、御堂關白道長施主となつて、式部のために、小御堂を建立したといひ、洛陽名所集には、一遍上人熊野權現の敎に由つて、誓願寺に結緣の念佛を行つた際、和泉式部の亡靈が出て來て、誓願寺の額にうつつたといひ、又同じことが誓願寺緣起にも見えて居る。これを戲曲にしたのが、有名な謠曲誓願寺である。京都寺町通六角蛸藥師間の西を式部町といふ。天明二年以前は、和泉式部町とよんだのである。その故は、この街の東にある中筋町に、誠心院一名和泉式部寺と稱する寺院があつたからで、こに墓石が現存してゐる。正和二年五月(式部歿後約三百年)の刻がある。誠心院智貞惠意といふ戒名を傳ふといふことである。(京都坊目誌による) この誠心院は、古く一條京極にあつた東北院の一部で、かの道長が建立した小御堂の遺跡だといはれて居る。淺井了意の京すゞめには、誠心院に和泉式部の御影と稱する比丘尼の像があり、式部の命日が十八日であるとして居る。しかるに、三國名所圖繪五十三には、日向國兒湯郡都於郡村の幸納といふ里に、式部由來記といふ舊記があるこの舊記によれば、式部は癩病を病んで、十月五日法華嶽に登り、正月十六日病癒えて都にかへり、更に再び日向に下つて、三月三日、四十三歲で死亡したと傳へて居る。しかし、式部の歿年は四十才臺では決してないと思ふ。山田清安に、法華嶽寺考、一名和泉式部事蹟考があつて、この間の消息につき、考をのべたものであるらしいが、また閲見するに至らない。

以上和泉式部の傳說は、傳說學或は比較說話學上の好箇の材料であらう。史實として見るに、資料が不十分で、その眞相を斷ずるは甚だ困難である。しかし「和泉式部晩年の傳說について、出家說と遊行說とのいづれを取るべきかといふに、恐らく出家說を取るべきであらう。」晩年出家して、淸少納言と交友の厚かつた事は、和泉式部集に見えて居る。

和泉式部傳說は、一箇の特殊な集團をなせるもので、說話學上考究すべき十分の價値を有するものである。この究明は、所謂宮女乃至美人零落徘徊傳說の本質を明かにするもので、一個の獨立せる學術的研究を要する。この小稿に求めらるべきものではない。

今この傳說群を、通俗的に分類すれば、おほよそ次の如くなるであらう。

一、出生及び出生地に關するもの。

二、詠歌の奇蹟に關するもの。

三、諸國遊行に關するもの。

1、腰掛岩に關するもの。

2、徘徊舊跡に關するもの。

3、式部塚に關するもの。

右の中一は已に論じた通りである。詠歌の奇蹟に關する者について云へば、

袋草紙四に

貴布禰御歌

奥山にたぎりておつる瀧つせに玉ちるばかり物な思ひそ

是和泉式部詣貴布禰詠云。

モノオモヘハサハノホタルモワカミヨリ、アクガレイヅル玉カトゾミル

子時男鹿ニテ式部ガ耳ニ聞歌云々。

古今著聞集　卷五　和歌に

和泉式部男のかれ〳〵になりける頃、貴船に詣でたるに、螢のとぶを見て、

もの思へは澤のほたるも我身よりあくがれいづる玉かとぞみる

とよめりければ、御社の内にて、忍びたる御聲にて、

奥山にたぎりておつる瀧つ瀬のたまちるはかりものな思ひそ

そのしるしありけるとぞ。

十訓抄　十　全文古今著聞集に類似したれば略す。

古今著聞集　卷五　和歌に、あらはれたる病魔の傳說は前に引く通りである。

十訓抄　十　全文古今著聞集に類似したれば略す。

次に奇蹟といふほどではないが、後世謠曲稻荷を起した傳說に次の如きものがある。式部の情熱がおもひやられる。

袋草紙　四に

賤夫歌

時雨する稻荷の山のもみぢ葉は青かりしより思ひそめてき

是ハ和泉式部稻荷ヘマイリケルニ、シグレノシケレバ、ミチニアヘリケル牛飼童ノアチチヌギテ、キセタリケルヲ、カツギテ、ウレシキコトナリト云テ、ヤミニケル、後ニコノ童、式部ガモトニキタリケレバ、ナニゴトニナド、タヅネケルニヨメル歌也、無便心ノアリケルトナン。但閑巷物語難信仰事也。

古今著聞集　卷五　和歌に

和泉式部忍びて稻荷に參りけるに、田中明神の程にて、時雨のし侍りけるにいかゞすべきと思ひけるに、田かりける童の襖といふものを借りて著て參りにけり。下向の程に晴れにければ、この襖なかへしとらせてけり。さて次の日、式部端の方を見出してゐたりけるに、大やかなる童の文もちてたたずみければあれは何者ぞといへばこの文參らせ候はむといひて、さしおきたるをひろげて見れば

時雨するいなりの山のもみぢ葉はあをかりしよりおもひそめてき

と書きたりけり。式部あはれとおもひて、この童を呼びて奥へといひてよび入れけるとなむ。

十訓抄　十　全文古今著聞集に類似したれば略す。

次に諸國遊行に關するものは、枚擧にいとまがない。日本傳說叢書その他を參考してあげて見れば次のやうなものがある。

(一)腰掛松系統

一　攝津國東成郡生野村大字舍利寺の舍利寺庭中和泉式部腰掛松(浪華百事談)
二　播磨國飾磨郡飾磨町和泉式部折居松(姫路名跡志)
三　播磨國飾磨郡餘部村大字青山和泉式部腰掛岩(播磨鑑)
四　播磨國赤穗郡那波村德乘寺境内の和泉式部雨寄りの栗樹(播陽古跡便覽)
五　日向國東諸縣郡高岡村法華嶽寺境内の和泉式部の髪掛松及び腰掛松(緣起)
六　京都一條京極東北院軒端梅(謠曲)(山州名勝志)

(二)徘徊舊蹟系統

一　山城國京都下加茂社北二町泉川(山州名勝志)
二　山城國宇治郡醍醐村小栗栖野御前社、式部の井(京羽二重織留)
三　山城國紫野大德寺中眞珠庵、和泉式部の井(名所都鳥)
四　近江國栗太郡大石村大字曾東、猿丸大夫と問答(栗太志)
五　播磨國を夫保昌と遊行(播磨鑑、名所圖會)
六　播磨國書寫山性空上人との傳說(峰相記)
七　丹後天橋立參詣(西北紀行)
八　上野國群馬郡總社町靈鷲山釋迦尊寺の古傳和泉式部此地遍歷詠歌の傳說(行脚隨筆)
九　伊勢國桑名郡大山田村大字東方字谷山竹林中の和泉式部硯の水(伊勢名勝志)
一〇　三河國鳳來山參詣(日向案内記)
一一　越後國米山藥師參詣(日向案内記)